

始

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 18 80 1 2 3 4 5

Prof. Minoru Tomura

Berlinisch

Band von ...

特230
780

Die
grammatische Untersuchung
des
Berliner Dialekts

mit
Erläuterungen der Wörter und Redensarten

von
M. Komura

Tokio / Daigakusha-Verlag



序

近世言語學の聖典と仰がるる Souffure の言語學原論に「由來文語なるものは一朝一夕に行はるるものではない。國民の大部分は全國的言語と地方的俚語とを同時に話す謂はば二言語狀態にある。斯の如き狀態は獨逸や伊太利に於いては極めて普通なこと、俗語は公用語と併存して行はる」と論じてゐる。

然るに、從來我國に於ける獨逸語の研究は、唯讀む爲の獨逸語の領域に止り、之を口にし耳にするには、余りに縁遠いものであつたことは、等しく獨逸に遊んだ者の痛感する所である。固より獨逸語にも標準發音及び標準語は存在する。併し此等のものは、流動絶え間なき言語の或る時代に於ける發音の標識乃至は語の形式に過ぎない。それは單に望まれたるものにして、常に必ずしも行はれるものではない。況や方言獨逸語と文章獨逸語との併立状態にあるが如き獨逸語にありては、相互の交錯影響する所甚しく、聲音上、用語上、常に新なる移動變遷の行はるることは蓋し又止むを得ない所であらう。

更に又一面、文章獨逸語の研究を以て終止せんとするものも、その發音語法の上に於て、正確なる認識を得んとするには、如何にしてもこの非制約的な言語との比較研究に俟たねばならぬことは云ふ迄もない。

加ふるに吾々は今日、獨逸の言葉の有りの儘の姿を觀なければならぬ時代に直面してゐる。即ちトーキーの發達、ラヂオの普及は特にこの方面の研究の急務を物語つてゐる。

本書は固より獨逸全土の各方言を網羅せるものではないが、その適用の廣汎な點に於て、伯林語の如きはこの種の研究のテーマとして、最も適切なるものであると信ずる。本書の内容は主として Dr. Hans Meyer の *Der Richtige Berliner* に據つた。著者の新に試みし文法的分類、方言の獨譯、和譯等に就いては出來得る限り過誤なきことを期したが、著者の淺學、尙其間遺漏なきことを期し難い。

幸ひ本書は研學の士の伴侶として、獨逸語界開拓の一助ともなり、學界に多少貢獻する所あらば、著者の甚だ欣快に堪えぬ次第である。

1935・1

著 者

目 次

第一章 獨逸方言並に低地獨逸語	3
第一節 獨逸方言	3
I 高地獨逸語と低地獨逸語	3
II 高地獨逸語と低地獨逸語の起源	5
III 獨逸方言と獨逸文章語	5
第二節 低地獨逸語	7
I 低地獨逸語の特徴	7
II 低地獨逸語並に高地獨逸語と英語	7
III 低地獨逸語と文章語	8
IV 低地獨逸語の文献	10
V 低地獨逸語と伯林語	10
VI 低地獨逸語と Plattdeutsch	11
第二章 伯林語概説	12
I 伯林語の意義	12
II 伯林人の特性	12
III 伯林語と他の獨逸方言との關係	13
IV 伯林語と他國語との關係	14
V 伯林語内の對立關係	16
VI 伯林語の文法的研究	17
VII 伯林語の翻譯態度	18
第三章 書 方	19
I 一般的書方	19

II 特種的書方	30
第四章 聲音論	21
第一節 母音	21
I a 並に a の組立綴音	21
II o	22
III u 並に u の組立綴音	22
IV e 並に e の組立綴音	23
V i の組立綴音	25
VI 母音短縮と母音脱落	25
VII 曲音	26
第二節 子音	26
A. 子音移動	26
I b, p, f の移動	26
II d, t, f (ʒ) の移動	28
III g, f, ch の移動	29
IV h の i 音に就いて	31
B. 流音並に鼻音	31
I l 並に l の重子音	31
II r 並に r の組立綴音	32
III m, n	35
C. 個々の聲音	35
I j	35
II ʒ	36
III w	36
IV 尾音脱落と母音添附	36
V 外來語の聲音	37

第三節 語調並に文調	38
I 語調	38
II 文調	42
第五章 語の形式論	45
第一節 名詞的品詞の變化	45
I 名詞の格	45
II 名詞の數	47
III 名詞の性	50
IV 代名詞	52
V 形容詞	55
VI 數詞	56
第二節 比較級	57
第三節 動詞變化	58
I 強變化動詞の變化形式	58
II 過去分詞	59
III 助動詞の特殊變化	59
第六章 語の構成論	61
I 語尾	61
II 合成語	63
III 特殊語形	64
IV 外來語式構成語	65
第七章 文法論並に文體論	67
第八章 文献の數例	83
I Hauslehrer	84
II Det liebe olle Haus	94
III Rummelpfeffation	98

第九章 若干の主要語に關する語句…………… 102

第十章 常用語並に慣用成句集 …………… 109

= の左は伯林語、右は文章語

≡ の左は伯林語、右は文章語に於ける意譯

So lang noch Untern Linden
Die alten Bäume blühen,
Kann nichts uns überwinden:
Berlin bleibt doch Berlin.

Wir haben in der Volkssprache einen Jungbrunnen, daß wir den abgelebten, überreizten Leib der Schriftsprache hinein versenken. Die frische, ungekünstelte Gedankenbewegung, die treffenden und sinnlich starken Wörter können namentlich heute als ein Gegenmittel für die Krankheiten unsrer Büchersprache dienen.— (Goethe.) Übersetzung, s. S. 6



獨逸方言竝に低地獨逸語
(Deutsche Mundarten und Niederdeutsche
Mundarten)

第一節 獨逸方言 (Deutsche Mundarten)

I 高地獨逸語と低地獨逸語

伯林語は低地獨逸語に屬する故、先づ低地獨逸語の獨逸方言に於ける地位を明確にしておきたいと思ふ。

獨逸方言とは獨逸文章語 (Deutsche Schriftsprache) に對する名稱にして、往時獨逸の各地方に散在せる種族間に用ひられたる語法 (Sprachart) に由來せるものである。

獨逸方言は之を二つに大別す。即ち高地獨逸語 (Hochdeutsche Mundarten) 及び低地獨逸語 (Niederdeutsche Mundarten) 之である。前者は又高獨逸語或は南獨逸語とも呼ばれ、後者は低獨逸語或は北獨逸語とも稱へられてゐる。

併し乍ら科學的に考へれば、法式の如何を問はず一領土の上に、漸次に分化せる方言に就いて明確なる言語的限界を設けることは出來ないが、唯語法の大局より觀て、之等方言大集團を地理的關係より、任意的に大別し得る丈である。即ち之に依れば、都市 Aachen, Düsseldorf, Cassel, Aischersleben, Wittenberg, Luckau, Reppen, Posen 等が、その境界線を劃することとなる。

而して此等二個の方言の Gruppe は更に又次の如く獨逸各地の種族を中心として、分類することが出来る

- | | | |
|-------|-------------------------------|--------------------------|
| 獨逸方言 | 高地獨逸語 | A. 上獨逸語 (Oberdeutsch) |
| | | 1. アレマネン語 (Alemannisch) |
| | | 2. シュワーベン語 (Schwäbisch) |
| | | 3. バイエレン語 (Bayrisch) |
| | | B. 中央獨逸語 (Mitteldeutsch) |
| | | 1. フランケン語 (Fränkisch) |
| | 西、東、南のフランケン語を含む | |
| | 2. チューリングェン語 (Thüringisch) | |
| | 3. 上ザクセン語 (Obersächsisch) | |
| | 4. シュレージエン語 (Schlesisch) | |
| 低地獨逸語 | 1. 低地フランケン語 (Niederfränkisch) | |
| | 2. 低地ザクセン語 (Niedersächsisch) | |
| | 3. 東低地獨逸語 (Ostniederdeutsch) | |

【註】 但し以上は言語學上の任意的分類にして、一般には高地獨逸語は唯、上獨逸語のみを意味し、低地獨逸語は低地獨逸語と中央獨逸語とを包含するものと看做してゐる。

更に茲に附言すべきことは、年代順に依る高地獨逸語の分類である。低地獨逸語も亦之に準ず。

1. 古代高地獨逸語 (Althochdeutsch)
八世紀——十一世紀前半。
2. 中世高地獨逸語 (Mittelhochdeutsch)
十一世紀後半——十五世紀。
3. 近世高地獨逸語 (Neuhochdeutsch)
十六世紀——現代。

近世高地獨逸語の中、十六世紀及び十七世紀に屬するも

のは、初期近世高地獨逸語 (Altneuhochdeutsch) と呼ばれ、こゝに初めて現代獨逸文章語の形體を具ふるに至つた。

II 高地獨逸語と低地獨逸語の起源

上述せる獨逸二大方言集團の起源は第二回子音移動 (Die zweite Lautverschiebung) に溯る。第二回子音移動とは紀元第五世紀乃至七世紀に亘り、獨り高地獨逸語のみに行はれし子音の變遷を云ふ。即ち獨逸語の源泉たるゲルマン語 (Germanisch) の無聲閉塞音 p, t, k がそれぞれ一個の閉塞音と、一個の擦音とより組立てられし pf, tch に迄移動したことを意味する。第二回子音移動は、低地獨逸語には行はれず了つたが、この移動に関する言語學上の細則に就いては、茲に論ずべき性質のものでないから、之を割愛することにする。

III 獨逸方言と獨逸文章語

方言と文章語とは、單なる程度の相違であつて、本質的には異なるものではなく、共通の性質を多分に帯びてゐる。

固より紀元第十五世紀頃迄は、獨逸には共通獨逸語 (Gemeindeutsch) なるものは無く、そこには單なる文章方言 (Schriftdeutsch) が存在するに過ぎなかつた。近世高地獨逸語即ち獨逸文章語なるものは、Martin Luther 以降に屬するものである。

文章語と方言とを比較するに、後者は前者より遙かに自然と密接に結合され、その語彙に於ても、比喩に於ても、或は又文の構造に於ても、より自然的で、より清新で、又より非技巧的である。それ又又素朴の譏りは免れないとは云へ、文章語が萎縮沈滞し、涸渇することを防ぐには、この自然發生的言語に負ふ所極めて大きい。方言の意義は即ちこの創造力にある。

Goethe も云へる如く「吾々は既に衰弱し、刺激に倦み疲れ果てし文章語の体内に注ぎ入れる若返りの泉を俗語の中に見出す。新鮮にして技巧の無い觀念の動きと、適切にして而も感覺的に強い言葉は、特に現代の書籍語の疾患に對する好箇の與藥である」と。

獨逸文章語に對する方言の影響は、之を次の三つの方面より觀察することが出来るが、唯文章語となりし各方言は互に錯綜せる故、その具體的關係に就いて述べることは至難である。

1. 中央獨逸語と文章語：

語彙は中央獨逸語より来る——Luther (1483—1546) 以來、中央獨逸語は初期近世高地獨逸語に無數の新造語を提供せし故、現代文章語の語彙の大半は、中央獨逸語に屬してゐる。それ故、この方言の文章語に與へし影響は實に甚大なるものと云ふべきである。

2. 上獨逸語と文章語：

言語形式は上獨逸語に基く——文章語に及ぼせる上獨逸語の影響も亦、相當強く現はれてゐる。何となれば上獨逸語の方言それ自體が、既に文章語の言語形式 (Sprachform) を有つてゐたからである。

3. 低地獨逸語と文章語：

低地獨逸語は「Niederdeutsch ist eben nicht Hochdeutsch」と云はれる程、方言色が濃厚なるものなる故、前二者に比すれば、文章語に與へし影響は極めて尠い。此項は別に第二節の同項目中に述べることにした。

第二節 低地獨逸語 (Niederdeutsch)

I 低地獨逸語の特徴

低地獨逸語に於ける一般的特徴は次の如し。

p は pf 又は f (ff) に代る：

Appel [Apfel], up [auf], deep [tief]

z は s 又は s (ss) に代る：

grot [groß], wat [was]

z は ch に代る：

maken [machen], icf [ich]

b は t に代る：

Bader [Bater], god [gut]

子音の前の **f** は単一音にして **sch** となること極めて稀なり：

slagen [schlagen], swimmen [schwimmen]

w 又は **f** は **b** に代る：

hewen [heben], Affchied [Abschied]

母音の前の **b**, **d**, **g**, **s** は有聲音を失はず：

seggen [sagen], Geld [Geld]

e, **o** は **ei**, **au** に代る：

Been [Bein], Dogen [Augen]

i, **u**, **ii** は近世高地獨逸語 **ei**, **au**, **eu** に代る：

min [mein], Hus [Haus], Friind [Freund]

縮小綴 **chen**, **lein** の代りに **ke**, **ken**, **ing** が用ひられる。

II 低地獨逸語並に高地獨逸語と英語

低地獨逸語は高地獨逸語より遙かに英語に近似する。そ

れはアンゲル人 (Angeln) もサクセン人 (Sachsen) も共に低地獨逸人に屬してゐたからである。それ故多數の英語は高地獨逸語に對し、特にその子音に於て低地獨逸語が高地獨逸語に對すると殆んど同一の關係を示してゐる。

p は **f** に代る: sleep [ʃlafən], hope [hoffen], help [helfen], ship [ʃiff], up [auf], open [offen, öffnen]

t は **s**, **z** に代る: water [Wasser], street [Straße], hot [heiß], out [aus], heart [Herz], tell [erzählen, sagen], two [zwei], to [zu]

k は **ch** に代る: make [machen], week [Woche], seek [suchen]

d は **t** に代る: door [Tür, Tor], day [Tag], garden [Garten], do [tun]

f 又は **v** は **b** に代る: half [halb], calf [Kalb], loaf [Laib], grave [Grab]

s は **sch** に代る: swim [schwimmen], sleep [schlafen], small [schmal], snow [Schnee]

III 低地獨逸語と文章語

文章獨逸語は元來高地獨逸語に基くとは云へ、低地獨逸語も亦、尠からず混入してゐる。低地獨逸語は高地獨逸語と言語形式及び語感等に於て、著しく相違するとは云ふものの、外國語に對する程、甚しくはない。殊に南北獨逸は

人種及び國情を等しくする結果、浸入せる低地獨逸語も融然と混和され、共通獨逸語は、獨逸各種族の國語として、全國的色彩を帯びてゐる。

文章語に於ける主なる低地獨逸語の範疇を擧ぐれば、

1. 海洋、航海に關する語:

Bucht, Ebbe, Küste, Strand, Ufer, Hafen, Werft, Bafe, Stapel, Boot, Kahn, Kiel, Bord, Kajüte, Flotte, Mast, hissen, kentern, entern, tafeln 等。

2. 海棲動物、魚類:

Robbe, Krabbe, Möwe, Dorsch, Butt, Roche, Sprotte 等。

3. 貿易品:

Kork, Anaster, Schildpatt, Bernstein, Nelke, Teer, Tran, Lafen, Daune 等。

4. 和蘭系低地獨逸語:

Sinnen, Flor, Watte, Beute, Lunte, Pife, Ritter, Wappen, Tölpel 等。

5. プロシヤ系の語:

dreist, flink, flott, hastig, knapp, stramm, steif, starr, sich sputen 等。

6. 軍用語其他の新語:

Schnaps, Stulle, Benne, Mettwurst, Kladde, Schmöker, Fagke, Müll, Abort, Spind, Strippe, Stulpe, Dse 等。

7. 其他北獨逸特有の語:

Moor, Geest, Schlid, Lehm, Torf, Mops,

Wippe, Riege, Red, Rippe, Wippe 等。

IV 低地獨逸語の文献

紀元第十六世紀の中葉迄は、低地獨逸語は高地獨逸語に對し、獨逸文献上獨立せる一支體を形成してゐた。

紀元第六世紀に現はれし救世主 (Seiland) 及び創世紀 (Genesis) は、共に世に知られてゐる。第十三世紀即ち中世低地獨逸語以降の作品には Eberhard のガンダースハイム韻文年代記 (Gandersheimer Reimchronik), Eike von Repkow のザクセン法典 (Sachsenspiegel), Heinke von Boß の動物寓話、Eulenspiegel の通俗文學、其他戯曲、詩歌、傳説等がある。而して此等は何れも高地獨逸語に移譯されてゐる。

紀元第十六世紀の末葉より、獨逸文章語成立の結果、低地獨逸語は唯方言による喜劇的方面にのみ使用されしが、十八世紀後半より再び眞面目な作品をも取扱ふに至つた。

Boß, Bärmann, David, Klaus Groth, Reuter, Brindman, Meyer, Mähl, Goefer, Brandt, Freudenthal, Fehrs, Poed, Stavenhagen, Boßdorf, Kröger 等はその著名な作家である。

V 低地獨逸語と伯林語

低地獨逸語は上述の如く低地フランケン語、低地ザクセン語、東低地獨逸語に岐れる。

東低地獨逸語は更に又四つの方言小集團に分類さる。

東
低
地
獨
逸
語 {
 ブランデンブルク語 (Brandenburgisch)
 メクレンブルク語 (Mecklenburgisch)
 奥地ボンメル語 (Sinterpommerisch)
 東プロシヤ語 (Ostpreussisch)

伯林語はこの中、ブランデンブルク語の系統に屬する。之を明示せば下の如し。

獨逸語→低地獨逸語→東低地獨逸語→ブランデンブルク語→伯林語

尙此の點に關する詳細は、第二章に於ける伯林語の項目に譲ることとする。

VI 低地獨逸語と Plattdeutsch

低地獨逸語は獨逸北半の廣汎な地域に行はれてゐる言語ではあるが、普通之を狹義に解し、Plattdeutsch と同義となつてゐる。Plattdeutsch とは特に獨逸の北東地方即ち Mecklenburg, Pommern, Oldenburg 等の方言を指稱し、Reuter, Brindman, Groth 等によりて、文献にまで採用されし言葉である。それ故低地獨逸語の文献と云へば、Plattdeutsch の文献と解すべきである。

第二章

伯林語の概説

(„Berlinisch“ im Allgemeinen)

I 伯林語の意義

伯林語は伯林方言 (Berliner Dialekt) と同義である。この方言は Hannover, Hamburg 等の方言と等しく、それ自身獨立せる方言集團を形成してゐる。固より全般的には、低地獨逸語の方言色を多分に有するも、部分的には相異なる點も亦頗る多き故、低地獨逸語の特徴を直ちに移して伯林語に適用することはできない。即ち伯林方言とはその方言固有の沿革、聲音脚色、言語形式を以て發達し、之に幾多の外來語分子の混和せる低地獨逸語系統の一地區方言である。

人口四百有餘萬を有する大首都伯林を背景として、滾々と湧き出づるこの方言は、その範圍に於いて、その適用に於いて、極めて汎く、従つて獨逸文章語並に他の地方の方言に與へる影響も亦頗る大きい。それは一面文章獨逸語の現在並に將來に於ける一大寶庫たると共に、他面方言排斥の人々にとりては、永年に療すべからざる癌ともなるであらう。

II 伯林人の特性

伯林人は粗野にして、伯林語は卑俗であると云ふ者もあるが、それは單なる中傷に類するものにして、伯林人の性格並に方言の本質を知らざる輕率な批評に過ぎない。

成程、伯林には飲酒、酩酊、打擲、罵詈、愚鈍、無智、狂氣、詐欺、窃盜等に關する語が、餘りに多く存在し且つ使用されてゐる。例へば飲酒に關する語にても約五百を算へ酩酊に關する語も亦之に準じて多い。この事は獨り罪惡方面の語にのみ限らないが、言葉の多様性が、伯林人を曲解させた事實に就いては疑ふべくもない。

併し乍ら伯林人の性格は、他の歐羅巴人乃至は獨逸人より粗野であるとは、今日何人も考へ得ざる所であつて、又その言葉の多様性の如きは、寧ろ彼等の批判的趣味、換言すれば繊細な區別に對する判斷並に感情を表示せんとする性向に外ならないのである。自分は伯林滞在中 Berliner Tageblatt に「日本には人を罵詈する言葉は一語も見出せない」といふ記事を見たことがあるが、その批評の不當なるや否に就いては、吾々は深く内省する必要があらうと思ふ。

彼等の嘲笑欲は皮肉であると共に、自己嘲笑であり、機智であると、共に諧謔である。彼等の用ふる言葉の本質は Hans Brennert の云へるが如く、低級劣惡な雜種獨逸語ではなく、常に背後に善意と自己嘲笑が隱匿されてゐる表現の創造的頓才 (Steifheit) である。

伯林人は彼等の方言を愛好すると否とに拘らず、無限の感化影響をそれより受け、又不知不識の間に、それを使用してゐる事實は拒むことはできない。

III 伯林語と他の獨逸方言との關係

獨逸方言の中へ猶太系獨逸語及びヴィーン方言を便宜上包含せしむ。

1. 現代の伯林語は、本來の伯林語と文章獨逸語との混淆語である。

2. 純然たる低地獨逸語を使用する場合も尠なからず。
(*Rulle* 穴、*fiesetig* 贅澤な、*stefern* 掻き起す、
stufen 突く、*talen* 愚圖つく)

3. 高地獨逸語と低地獨逸語と併用される場合もあり。
(*hd. Nase*—*nd. Nese*; *hd. Fote*—*nd. Pote*)

4. 猶太系獨逸語も多く用ひらる。その中にはヘブライ語に迄溯るものあり。

(*meschugge* ≈ *verrückt*; *Schante* ≈ *schlaffer*,
charakterloser Mensch; *Pleite* ≈ *Bankrott*;
mies ≈ *häßlich*, *unangenehm*)

泥棒の隠語 (*Rotwelsch*) の中の猶太系獨逸語は、刑事問題に關する新聞の報導を通じて、世に知られてゐる。

(*ausbaldornern* ≈ *ausspüren*; *Schmiere stehen*
≈ *Wache halten*; *Raschemme* ≈ *Rneipe von*
üblem Ruf)

猶太系獨逸語はその數の多きに拘らず、依然として外國語の響を與へてゐる。

5. ヴィーン方言よりの傳來語は極めて尠い。それは唯伯林で行はれし道化芝居を通じて傳來せる語に限らる。

(*hat ihn schon*. そんな事は夙にやつて了つた;
Techtelmechtel 痴情關係; *Buz* ≈ *Spaß*)

IV 伯林語と他國語との關係

1. 佛蘭西語の影響

他國語の中、伯林語に最も力強い影響を與へしものは佛蘭西語である。1685 年以來、佛國より亡命せる新教徒が、

伯林を定住地として佛蘭西植民地を拓いたが、その當時の伯林の人口は僅か二萬を算へるに過ぎなかつた。又その時代の佛語は一般獨逸人により崇拜され、特に社交用語としては絶對視されてゐた。其後 1806 年より 1813 年に至る間 *Napoleon* が舍營を伯林に設けるに至り、こゝに一旦衰微しつゝあつた佛語が更に擡頭し出し、目覺しい發展をなした。*Glabrenner* の著書に依れば、その當時佛語が下層階級迄浸潤してゐたことは、今日より甚だしかつたと云つてゐる。

併し乍ら斯の如く普及されし佛語も、單に伯林語の語彙を豊富にせしみに止り、本來の文法上には何等の影響を與へざりしのみならず、語句並に文のアクセントは依然として伯林語の用法に従つてゐた。

然らば佛語が如何なる方法に於て伯林語に影響せしか、それは語源學研究上資する所多きを以て、以下若干例示することにする。

a. 單純な傳來語:

(*Rulör* = *couleur*; *Rurage* = *courage*)

b. 伯林語式に變形された傳來語——傳來語の大部分は之に屬す:

(*Rinterlitzen* = *quincaillerie* 瑣事、無用なこと;
Blängschaf = *pleine chasse* 大急ぎ; *etepetete*
又は *ete* = *être peut être* 氣取つて)

c. 佛語の語尾を獨逸語に附したるもの:

(*Rleedage* = *Rleider*; *Rneipjee* = *Besitzer der Rneipe*)

d. 新語を佛語式に造りたるもの:

(*Rrijöse* 理髮師; *Rouffade* 情事)

- e. 傳來語に新意義を與へしもの：
(Manschetten \approx Furcht; Kaiser—Beesé と讀む
 \approx Einweißgebäck mit Schlagahne)
- f. 他より傳來せる語を、佛語式に發音するもの：
(Téléphon \approx Fernsprecher)
- g. 佛語と獨逸語とを組合せたるもの：
(Pleesierberjnien 娛樂; Jardinarten 庭)

2. ポーランド語の影響

伯林にはポーランド人が可なり移住せるに拘らず、その影響は極めて尠い。

(pomade \approx gleichgültig (poln. pomalu); dalli
 \approx vorwärts (poln. dalei); Grad \approx Hunger)

3. 英語並に伊太利語の影響

英語及び伊太利語に至りては、その影響する所、ポーランド語より更に尠い。

英語の場合：

Saljenflot 上衣の裏地 (engl. Italian cloth)

anjepeest \approx sehr schnell (engl. pace)

Leddi 犬の名前 (engl. lady)

伊太利語の場合：

Piccolo ボーイ; futschifato perduto 又は futsch
perdü \approx verloren

V 伯林語内の對立關係

伯林方言は二種に分類さる。

1. キーツ語 (Kiepsisch)

キーツ語は本來の代表的な伯林語である。この方言は

又 Lichtenberjer Kiepsisch とも言はれ、伯林の Frankfurter Tor に面せる北部の人々の言葉であつたが、現在は伯林の殆んど全地域に亘り、その影響を與へてゐる。

2. フォークトランド語 (Vogtländisch)

伯林の Hamburger Tor より北東に面せる地域の言葉にして、曾つてはザクセンのフォークトランドの大工、左官職等が夏期に伯林へ移住して、その郷土の言葉を移植したに始まる。この方言は一般に卑俗なものと看做され „Sprech doch nich so Vogtländisch!“ と迄言はれてゐる。

以上二個の方言は Friedrichshain を以て境界線を劃さる。而してこの方言に存する最も重要な特徴は、das をキーツ語では det と云ひ、フォークトランド語では dis と云ふ點にある。

VI 伯林語の文法的研究

曾て伯林大學哲學部より „Ohne die Bearbeitung des Gegenstandes im vollen Umfange zu fordern“ の條件の下に „Untersuchung des Berliner Dialekts“ なる懸賞論文が二回も出されたことがあつた。斯の如き研究を爲さんとするには、先づ低地獨逸語に関する文献と、伯林市の記録を通じて觀たる沿革史的基礎を究めねばならない。

次に主として商業語を通じて浸入せる高地獨逸語及びその他の傳來語に就いて調査する必要がある。何れにしても伯林語の文献を各時代、各地域別に言語學的方面より研究して、こゝに初めて統一ある文法的組織が確立される譯である。

Mehr als eine Preisaufgabe! Eine Lebensaufgabe!
とも云ふべきであらう。

VII 伯林語の翻譯態度

本來の伯林語は文章語の派生的意義に依つて解するのを原則とする。方言の解釋は方言に習熟することによつて初めて可能であるが、又直観によつて、その眞髓を捕捉することを忘れてはならない。併し方言に關する何等の豫備智識無くして唯直観のみによつて、理解せんとするが如きことは甚だ無謀であるが、それと同時に又文章語に對すると等しく、唯論理的、概念的にのみ方言を理解せんと試みるが如きも、自然的な、非技巧的な言葉に對する妥當的な態度とは決して云はれない。

第三章

書方 (Schreibung)

伯林語の書方を、劃一的に規定することは容易でない。即ちその理由の一つは、この方言に採用されし語彙及び語法は、教育程度の異なる階級に屬せることゝ、他は *Profllie* (一語のアクセントが次の語にかゝり、無揚音となること)、*Enflife* (一語のアクセントが前の語にかゝること) 及び *Œthlipjis* (母音を以て始まる語に前行する言葉の語尾の母音省略——*dacht' er*) の聲音法則に依り、言葉が常に一定せざる爲である。併し乍ら „Schreibe, wie du sprichst“ なる原則は、歴史的基礎の上に存する標準的一般書方を反つて混亂に陥れる結果となる。又一方種々に話され又は書かれる言葉も、文書並に印刷に附せられる時は、結局統一的に再現せねばならない。それ故忠實なる發音通りの書方によつて、語の理解並に發見に就いて困難を覺えるが如き文字は、尠くとも次の如く標準書方を規定しておく必要がある。

I 一般的書方

1. 高地獨逸語(文章語):

g は **i** に、書き代へられる。

t は **ð** に、

pf は **p** 又は **f** に、

ei, eu, au は **ee, ei, oo** に、

a 及び **ä** は **e** に。

2. 外來語:

c, ch は **f, ð, [ch]** に。

dieu は **dche** に。

3. 高地獨逸語に缺如せる二個の聲音には、特別の文字を以て補ふことを要する。即ち

單母音の後の軟音 **ß** は **z** に代る。

(Fuzel \approx Fädchen; frizelig \approx frauß)

軟音の **[ch]** は **g** (獨逸語 *genieren* に於ける佛語 *g* の音)に代る。

(Drege \approx Dummkopf; Duge \approx blöder Mensch)

4. 或時は顎音となり、又或時は喉音となる **ch** 及び **i** の音を示すことは、非常に困難であるが、先づ伯林語 **r** に近似せるものと見ればよい。

—vgl. S. 32

II 特殊の書方

個々の場合に於ては發音の特徴を再現せんが爲、話すが如く記す。又時には語の最も慣用的な省略及び圓滑を留保することがある。

第四章

聲音論 (Phonetik)

第一節 母音 (Vokale, Selbstlauter)

I **a** 並に **ä** の組立綴音

1. **ä** は **e** となる。日本人の發音に近似してゐることは注目に價する。

(zählen = zählen; Seje = Säge)

2. **au** は低地獨逸語にて一個の **ō** をとれる場合同じく **oo** となる。

(Boom = Baum [nd. Bom]; loofen = laufen; alooben = erlauben 但し erlaube, holde Taube. \approx erlauben Sie, bitte. などは反つて氣取つて云ふ場合に用ふ)

au は低地獨逸語にて一個の **u** をとれる場合變更せず。

(Haus; frauß; lauern)

又低地獨逸語を其儘用ふる場合もある。

(Kulbarsch = Kaulbarsch; Schnute = Schnauze; stufen = stauen)

äu は低地獨逸語に於て **oo** をとれる場合は **ee** となる。

(Beeme = Bäume [nd. Boom]; dreemerig = träumerisch)

其他の場合に於て **äu** は **ei** に變音する。

(Heiser = Häuser; freiseln = fränseln
 例外: Laufe = Läufe; Mause = Mäuse)

II

ö は e となる (ä の場合と同じ)

(Lecher = Löcher; needig = nötig; bese = böse;
 mechten = mögen)

併し乍ら zwölf = zwölf, öde & langweilig の如く ö
 音が正確に保持されてゐる語もある。又低地獨逸語にも往
 * ö 音の失はざる語が存在する。

(Före = Feind; dösig = benommen; flönen 同
 ことに就いて長たらしく話すこと)

III u 並に u の組立綴音

1. **ii** は i となる。標準發音に於いても短音 ü を *h* 又は
f と結合して發音することは、吾々日本人に取りて非常に
 困難を感じる。又此場合標準發音にありても、英語の *ill*
 の *i* 音に近似させて發音することを要求してゐる。
 (hibsch = hübsch; Fiße = Füße)

2. **ur** は往々 *ür* となる。これは伯林に於ける佛蘭西植民
 地より生じたものである。

(Mürmel = Murremel; Türm = Turm)

3. **iir** は *er* の音を出すことがあるが、それは只諧謔的に
 用ふる場合に限らる。

(ferchterlich = fürchterlich; Ferst = Fürst——以上
 はザクセン語及びシレーヂェン語の影響)

4. **au** は I を, **eu** は IV を見よ。

IV e 並に e の組立綴音

1. **eu** は *ei* に變ず。

(nei = neu; heite = heute)

2. **ei** は低地獨逸語に於て一個の *e* をとる場合、同様に *ee*
 となる。

(Arbeet = Arbeit [nd. Arbeit]; fleen = flein)

但し、*ei* が I の前にあるときは、*ee* に變音すること
 を避けてゐる。

(heil; Seil)

3. **ei** が低地獨逸語に於て一個の *i* をとる場合、標準發音
 に従ふ。

(Mein [nd. min]; Schwein; reiten; fein)

純粹なる高地獨逸語を使用する場合も亦標準發音に従ふ
 こと多し。

(Geist = Geift; 'n heißer Dag = ein heißer Tag)

4. **e** は前述の如く、*ä, ö* 及び時には又 *ei* の音をも現はす
 故、Regen, Säge, König, Stein 等は等しく *e* 音を
 保有する。その結果、異なる語が同一發音を爲す場合も尠
 くはない。

(Sehne と Söhne; Steine と Stöhne; wehre
 と wäre; kenne と können; Mächte と möchte)

5. **e** が *ö* に變音することあり。

(ölwe = elf)

6. 語尾 **er** は、最も注意を要する發音なる故、こゝに先づ
 標準發音と一般方言發音とに就いて述べることにする。

此の兩者の發音の相違は *er* の *r* の音にある。即ち標
 準發音にては本來の *r* 音に従ふが、方言發音にては *a* の保

有音に化する。(子音の流音の項参照) 即ちエル、エア、兩音の生ずる所以で、其の正否に就いては由來論議の對象となつてゐる所である。自分は一般會話に於ては少くとも方言發音を推奨したいと思ふ。何となれば、前者は標準發音と云ひ乍ら、現在は全國的に殆んど用ひられざる *unbequem* にして、*unpraktisch* な發音となつてゐるからである。發音辭典に現はれたるこの語尾エル音は概ね *Schauspieler*, *Musiker* の如き音色を糧にして生きる人間の所謂舞臺發音であつて、而も彼等にありてもその完成には相當の歳月を要すると云はる。況や *Geiser* と *Geisel* との區別さへ困難とする日本人は何を好んでこの發音を模倣せんとするか。それも唯單語の發音のみに止まらば敢へて、妨げないだらうが、一般會話にまで用ふるに及んでは、實に不愉快な感じを起さずには居られない。機關車をキクワンシャなどと仰々しく云はずとも、キカンシャの方如何ほど *zart* に *angenehm* に *bequem* に而も *neumodisch* に響くことか。

唯伯林語に於ける語尾 *er* は直ちに *ah* 又は *a* と發音され、*e* 音の默殺が餘りに強く行はれてゐる點だけは、多少考ふべきことであらう。

er は *a* となる。

(*Vata* = *Vater*; *Mutta* = *Mutter*)

er は又 *aa* となる。

(*Reelnaa* = *Reelner*; *Alempnaa* = *Alempner*
Udlaa = *Udler*)

人名は凡て *aa* 音となる。

(*Edena* = *Edener*; *Wagna* = *Wagner*)

7. **ren** 及び **gen** (この場合の *g* は懸壜垂振動音 *r* に近似す) は *an* となる。

(*Dan* = *Ohren*; *Dan* = *Augen*)

V **i** の組立綴音

喉音 *a* を保有する *r* の前の母音 *i* は、*ü* に似た音を有す。但しこの發音は時代遅れとなつてゐるやうである。

(*Bürne* = *Birne*; *Kürche* = *Kirche*)

ir は *ür* の如く諧謔的に *er* に變音さすことあり——*Kerche* = *Kirch*。 *isch* に就いては次項 VI 3 参照。

VI 母音短縮と母音脱落

1. 多數の言葉に於て母音は短縮さる。

(*licht*, *licht* ← *liejen* = *liegen*; *krift*, *kricht*, *jekricht* ← *friejen* = *friegen*; *fiste* 又は *fiehste* = *fiehst* du; *vievel* = *wieviel*; *wol jenuch* = *wohl genug*; *enzeln* 又は *eenzeln* = *einzel*n; *dreizen* より *neizen* 迄 *h* (即ち *e*) 省略; *Dinstag* = *Dienstag*; *Schnittloch* = *Schnittlauch*; *uf und ruf* 又は *uff und ruf* = *herauf und hinauf*; *rin* = *hercin* 又は *hinein*; *wat kift'n?* = *was guckst du denn?*)

2. 子音重複によりて母音を短縮さすことあり。

(*ville* = *viel*; *widder* 又は *wieder*; *simma* = *sieh mal*; *Letter* = *Leiter*; *Emmer* = *Eimer*; *Mille* = *Mühle*; *klenner und schenner* 又は *kleener und scheener* = *kleiner und schöner*;

3. 語尾 **isch** の **i** は語調の爲脱落す。
(barbisch = barbarisch; berlinisch; bayersch;
neumodisch; tickisch = wütend; steetisch = städtisch)
4. 母音脱落が更に他の母音及び子音の省略を招くことあり。
(de preischen Farben = die preußischen Farben;
vor't schlesche Dor = vor dem schlesischen Tor;
in zoolischen Garten = im zoologischen Garten;
Bosche Zeitung = Bössische Zeitung. 新聞の名)

VII 曲音

伯林語の母音は一般に圓滑を失つて行く傾向、即ち曲音をとらない傾向が支配してゐる。(母音 I. II. III 参照)併し又それと同時に圓滑化する場合もないではない。之は Schlesisch-Sächsisch の影響によるものである。例へば gebildet (= gebildet) を氣取つて jebüld(e)t と云ふが如きである。尙曲音並に強變化動詞の幹母音變化に就いては語の形式論、語の構成論に就いて参照されたし。

第二節 子音 (Konsonanten, Mitlauter)

A. 子音移動 (b, p, f; d, t, f(ß); g, r, ch; h)

I b, p, f の移動

1. **pf** は中間音 (Inlaut) 又は語尾 (Auslaut) に於いては **pp** となる。

(Appel = Apfel; Knopp = Knopf; Karpe =
Karpfen; Proppe = Pfropfen; Strump =
Strumpf; Zippel = Zipfel)

pf は頭音に於いては **f** と發音す。

(Ferd = Pferd; Flaume = Pflaume; Fund =
Pfund — 何れも傳來語)

2. **pp** は **bb** となることあり。

(Ribbe = Rippe; strubbelig = struppig)

低地獨逸語の **bb** は頻々と用ひらる。

(bibbern = zittern; wabbelig = quabblig = flau;
Zibbe = Ziege)

3. **b** は頭音に於いて **p** となることあり。

(Budel = Pudel; Brezel = Brezel = Rätzfel)

4. **p** が頭音に於いて **b** となる場合は次の三語のみ。

(baff od. paff = verblücht; buffen = puffen =
schlecht handeln; Baul = Paul 人名)

5. **f** は中間音にあるときは、**b** 又は **w** となる。

(Reber = Räfer = verrückter Mensch od. nied-
liches Mädchen; Deibel = Teufel; Stiebel =
Stiefel — fünwe = fünf; ölwe = elf; Briewe =
Briefe; wiewe = wif [französisch lebhaft])

6. **pf** に代つて、**w** を用ふることも稀に見る。

(Trümwe = Trümpfe)

7. 尾音並に中間音轉換に就いて、尙若干の例を示せば、

- { ab (發音は app) ≈ abgearbeitet, abgestoßen;
'ne abbe Ede ≈ eine abgestoßene Ede — abbe
は ab の形容詞的用法にして發音は abbe.
{ doof = nd. taub ≈ dumm;
'ne dootwe Nuß = eine taube Nuß, 實の無い胡桃
又は馬鹿。
{ steif 硬つた — 威嚇的に用ふ;
in steiven Arm verhungern lassen ≈ verfrieren
lassen.

II d, t, f(s) の移動

1. **t** は頭音に於いて、**d** となること多し。
(Daler = Zaler; Tisch = Zisch; dot = tot; dragen
= tragen; dun = tun)
2. **tt** は中間音にありては往々 **dd** となる。低地獨逸語に
は元來 **dd** の音多し。
(schlidder = schlittern; Boddel = Bottel; lodde-
rig = lotterig — buddern ≈ graben; Ruddled-
muddel ≈ alles durcheinander; verheddern ≈
verwirren (結び絲など); Padde ≈ Frosch)
Schönhauser Tor に面せる老人の中には、hatte, hätte
の代りに hadde, hadde と云ふ人あり。
3. **d** を逆に **t** に響かし、又は **t** を中間音に於いて、**d** と
いふ場合も稀にあり。
(Anektote = Anekdote; Natel = Nadel; Berjamite
= Pyramide ≈ Weihnachtspyramide — Madraße
= Matraße)

4. f は t を屢々代用する。

(det = das [dat と云はず]; wat = was; welcher
= welches; solchet = solches; manchet = manches;
jedet = jedes; unfert = unser; ihret = ihres; et
= es [e を apostrophieren するときは、又 es と
も云ふ])

det は以前 **des** と氣取つて云はれたことがあつた。det
はキーツ語で、dis はフオークトラント語であることは、
既に伯林方言内の對立關係の頂に於て説明せし所である。

中性名詞の前の形容詞の **s** も亦 **t** に變音す。

('n armet Kind = ein armes Kind; 'n kleenet
Männeken = ein kleines Männchen)

III g, t, ch の移動

1. **g** は **i** に代用さる。よく伯林の方言を「Zut jebrate-
ne Gans mit goldenen Gabeln jut jeessen. = Gut
gebratene Gans mit goldenen Gabeln gut gegessen」
と稱するほど、**i** 音は代表的な聲音變化となつてゐる。併
し乍ら原則としては、此場合 **i** 音は常に頭音にあるか、又
は **e, i, ei, l** 及び **r** の後にあり。

(Jejend = Gegend; Bijarre = Zigarre, Zeije =
Geige; Jaljen = Galgen; Zurjel = Gurgel)

Augen を Dogen 又は Dojen と云ふが、後者の發
音は古い伯林語 **g** の發音を嘲弄して、parodistisch に用ひ
しことより始まる。又物好きに Jerusalem を Gerusalem
と呼ぶ者があるが、それは西フアーレン語の影響の結果で
ある。

2. **g** は a, o, u, au の後に於ては **r** (後述) に近似せる一種獨特の音に變ずる。この音を **g̃** にて示すことにした。

(ja^{g̃}en; Bo^{g̃}en; Ku^{g̃}el; fa^{g̃}en)

此の發音は正確なるものと看做されてゐる故、次の語に於いては發音の相違を明瞭にせねばならぬ。

(ja^{g̃}en ↔ Je^{g̃}er; Bo^{g̃}en ↔ bie^{g̃}en; Ku^{g̃}el ↔ Ke^{g̃}el; fa^{g̃}en ↔ fe^{g̃}ien = fä^{g̃}en)

併し外來語は此の場合、**g̃** に代り **i** を用ふ。

(Maⁱstrat; Paⁱpajei; Traⁱjödie; Draⁱjoner; Theoloⁱgie; Porⁱtugal; Auⁱgust)

但し外來語に於いても、獨逸語化されし語尾をとる場合は、**g** は (2) の規定に従ひ **g̃** となることもある。

(Theolo^{g̃}e; theolo^{g̃}i^{ch}; tra^{g̃}i^{ch})

第一綴にアクセントある外來語は、軍人仲間に於いては **g̃** の發音をなす者あり。——Ma^{g̃}estät.

3. **g** は語尾にありては **ch** に變音す。此の場合 c, i, ci, l, r の後に於いては口蓋音となり、a, o, u, au の後に於いては喉音となる。

(We^{ch} = Weg; Fri^{ch} = Krieg; Zwi^{ch} = Zweig;
Sal^{ch} = Salg; Zwer^{ch} = Zwerg — Dach = Tag;
floo^{ch} = flog; jenu^{ch} = genug; Sauch = Saug ≈
Saugflasche)。

4. **g** は又脱落する場合もあり。

(du k^grist = du k^griegst ≈ du bek^gommst 此の場合の **g** の脱落は du w^gist [du w^gillst] に於ける **l** の脱落と共通である)

5. **g** に代り **f** を用ふることもあり。

(fuden = guden; fludern = gluden 水のどくどく
流れ出づること; Zide = Ziege)

6. **f** は稀に **ch** に代用さる。

(Marcht = Markt; Kalch = Kalf)

7. **ch** は lich の語尾となりて母音が續く場合 **i** となる。

(fürchterliche = fürchterliche — einzige に於ける
eenzige の如し)

8. **ch** は sch となることあり。

(nischt = nichts; Rescher = Röscher)

ch が母音の間に介在し、而も先行母音が e 又は i の音を有するとき、標準發音に於ても、音便上 **i** の音を多少加味して發音する必要あり。

(Be(i)cher = Becher; Kir(i)che = Kirche; Bü(i)cher = Bücher)

IV **h** の **i** 音に就いて

h が母音の間に介在し、先行母音が e の音を有するとき、**i** に變音すること多し。

(Ze^hen = Zehe; Fle^he = Flöhe; he^her = höher;
ne^her = näher; fre^hen = frähen)

B. 流音竝に鼻音 (**l, r; m, n**)

伯林語の **l, r** は共に強い a 音を保有す。

I **l** 竝に **l** の重子音

1. **ll** は發音の同化作用により、後行の諸音を代用することあり。

(Mulle = Mulde; Melle = Melde; Olle = Alte
 嬢; Kulle = Rudolf; Mulle = Mutter; Mulleten
 = Mütterchen; Kulle = Kurt; schnulle =
 schnuddlig ≈ nett, angenehm)

2. U の脱落

(du wist = du willst; du sofst = du sollst; sof
 = soll ich)

3. I の脱落

mal の I は大抵の場合脱落する。此語は特に伯林人に
 愛用さる。

(komma her = komm mal her; nimma det =
 nimm mal das; simma = sieh mal; zeima =
 zeige mal)

II r 並に r の組立綴音

1. r は綴音を分ちて明確に発音せざる故、i と r との中
 間音即ち ġ 音に近似する。従つて以下の言葉に於いて發
 音上の區別を附することは不可能である。

(Waren — Wagen; Klare — Klage; Jahren—
 jagen)

2. rt 及び rʒ は短母音(主として a, o, u) の後にありて
 は cht 及び chʒ に變音す。

(Fachten = Farten = Garten; Rachte = Rarte;
 Wocht = Wort; Sichtel = Gürtel; sichzen =
 vierzehn — 但し書方は rt, rʒ に従ふ。)

此の發音は rrt と書かれたる場合、又はアクセントの
 無い綴音にありては行はれない — Inarrt.

3. r の a 音

a. r と共に一綴音を構成する長母音の後に於ては、r は
 a の短音となる。此の場合決して二音綴に發音すべきで
 ない。

(Doa = Dhr, fieast = führst)

b. er, der, dir, mir, wir 等はアクセントを附して
 發音するときは、eaa, dea, dia, mia, wia となる。但
 し此等の語を標準發音に従ひて、一般會話に於て用ふれ
 ば、反つて geziert に響くことは、語尾の er の場合
 (母音 e の項参照) と同様である。

又 er.....wir 等にアクセントを附せずして、發音
 するときは、a, da, da, ma, wa となる。

(Hattat = hat er es; Gib ma wat ab = gib mir
 was ab)

c. wirft, wird は wist, wit に短縮され、watte!
 は warte! と共に併用さる。warft, wart, waren
 はそれぞれ waast, waat, waan に變ずる。

d. 長音 a の後、t, ʒ, ft の前に於ては、r は ch に
 變音す。

(Baacht = Bart; Saachʒ = Sarʒ; spaacht =
 sparft — 但し書方は r に従ふ)

長音 a の後の r は、尾音又は抑揚なき綴音に於い
 ては默音となる。

(Jahr, Oskar, Karfreitag, dankbarste, wahr,
 war 等、例へばこの中、後者の二語は共に waa と
 發音するが如し)

e. **er** (or), **re** (ere, eri), **rer** はアクセント無き綴音にありては **a** となる。(母音 **e** の項参照)

(Baua = Bauer; Dofta = Doktor; balooan = verloren; Doan = Ohren; längan = längeren; Schneidan = Schneiderin; Maua = Maurer; Booa = Bohrer!)

f. **Herr** は Titel として用ふるときは **ha** と呼ぶ。

(Ha Meha! = Herr Meyer!)

g. **r** は押韻の場合にも **a** に變る。

(Afta, kleenet fieset Lafta, laß den ollen Anasta = Afta [= Anastasia], kleines süßes Laster, laß den alten Anaster. 可愛い、アスター嬢、あんな頑固な老人なんか打つちやときなさい; Ich komm denn per naß da. = ich komme dann durch naß dort.)

h. **re** は **a** の次に來り、語を閉ぢる場合は、その儘用ひられ語尾を響かす。

(Ware; fahre; saure. 例外 Iaua = laure; fletta = flettere)

i. 或種の言葉特に外來語(高地獨逸語を含む)に於いてアクセント無き **ar** は **a** となる。

(Chalotte = Charlotte 女名; Kaline = Karline ≈ Schnapsflasche; Richad = Richard; Paterr = Parterre; Katoffel = Kartoffel; Schatefe = Schartefe)

其れ故高地獨逸語を次の如く呼ぶは、誤つて構成された場合である。

(Karnidel = Kaninchen; Kartun = Kattun; Kartarrh = Katarrh. 又 famos を vermoost と誤つて呼ばれる理由も、之によつて分明となるであらう)

III m, n

m と **n** とは聲音上嚴密に區別することはできない。**n** は屢々佛語の影響を受けて、**ng** となることがある。

(Balfong = Balfon; Droschfong = Droschke)

alles は音聲擴張に依り、**allens** となる。

n は同化作用により、往々 **d** 音を抹殺す。

(Rinner = Rinder; anners = anders)

C. 個々の聲音 (f, g, w, d, t, n, g)

I f

1. **f** は **r** の後にありては、**sch** と發音さる。

(erscht = erst; Ferschte = Gerste; Durcht = Durst; Wurscht = Würst)

又次の如き發音は、ザクセン語の影響の結果にして、本來の伯林語としては純粹のものでない。

(zwarfchtens = zwar; aberfcht nanu = aber nanu 併し又どうして; zu überfcht = zu oberst 一番上に)

2. **f** は **r** の後にありては、佛語の **g** 音に轉することあり。

(Girge = Girse; Wirgefohl = Wirsingfohl)



II **ß**

1. **ß** の代りに鋭音 **f** (**ß**) を用ふることあり。
(siebßen = siebzeñ; siebßig = siebzig)
2. **ß** の代りに軟音 **f** を用ふることもあり。
(Kränße = Kranz; Schwänße = Schwanz)
3. **ß** が **fch** に變る場合も稀に見る。
(Wanße = Wange)
4. **Balm** のときは本來の意義に於ける **Psalm** を意味し、**Salm** の場合は「長談義」を意味する **Psalm** を示す。
又 **Peterzillje**, **Zmirna** は、それぞれ **Peterfilie**, **Smyrna** に代つて用ひらる。

III **w**

r の前の **w** は、古語の頭音の模倣によつて附せられたものである。

(wringen = ringen; wirribeln [wirbeln の字位轉換か、又は rubbelen, reiben に古語の頭音 **wr** を附して造りし語である]; Wraße = Ratte od. Raße; [Warze の字位轉換])

IV 尾音脱落 (**d, t, n**) と尾音添附

何れの方言にありても、アクツェントの影響と發音の簡易化とにより、尾音脱落と尾音添附とは頻々に行はれる様である。

1. **d, t** は子音の次に於て脱落するのが、一般である。
(is = ist; fin = find; nich = nicht; sons = sonst;
Nu jib's bald wat = nun gibt es bald was)
2. **un** (und) は特に齒音の前に於いて用ふ。
(um un dum = um und um; über un düber =

über und über — 之を前語尾音の次語頭音化 [Sandhi] と云ふ)

3. 齒音 **t, d** 等が語尾に添附する場合あり。
(anderst = anders; Laband = Laban; lieberst = lieber; ebend = eben; drüwend = drüben)
4. **n** は往々尾音に於て喪失す。
(Karpe = Karpen; Lappe = Lappen; nee = nein; nu = nun; 單、複數によりて異なる場合: der Lappen — die Lappe; der Zaden — die Zade)
5. **n** が語尾に添附することもあり。
(Neejen = Neige; Zejen = Zehe — 'ne Narche = eine Arche [不定冠詞より離れし **n** が頭音化])
6. 次の語に於ては **d** は脱落す。
(Meechen = Mädchen; Ornung = Ordnung; orntlich = ordentlich)
7. **f** は又餘分に添附されることあり。
(Sonderßgleichen = Sondergleichen; Menschensfind = Menschenfind; meinswejen = meinetwegen — 此等は造語上の簡易化より來るものと解せらる。例へば wenn du は wenn de となり、更に又 wennste となれるが如し) — 語の構成論參照。
尾音に就いては語調、語の形式論、文章論の否定の項參章。

V 外來語の聲音

佛語の **g** 音 (獨逸語 **genieren** に於ける) に従ふ語:

Brüge ≈ Brause im Baderaum; Drege ≈
Dummkopf; wugig ≈ mit dichtem, ungekäm-
mtem Haar; Gent = Gentleman ≈ gezielter
Modenspez; Gum ≈ Kausch

佛語の *o* 音(短母音の後の)に従ふ語:

Fuzel ≈ Fädchen; friezelig ≈ kraus; quazeln
≈ viel und töricht sprechen

第三節 語調並に文調 (Wort- und Satton)

I 語調

1. アクツェントの位置。

一語より成れる語の最強揚音は、常に第一綴音にある。

—Schwei'zerkese = Schweizerkäse

二語より成れる句の最強揚音は、第二位の語にある。

—Pogdamer Dor [= Tor], Sadicher Marcht [=
Markt] に於いて Dor, Marcht に; alle Jubeljahr に
於いては jahr にある。

da なる語を以て強調する場合、この語は一文章の終り
より第二位に置かる。

(Pötke war wieder da nicht. Wat kann ich 'n
da dafür? = Was kann ich denn dafür?)

2. 語調上の省略。

a. アクツェント無き母音(主に *e*, 又は *e* にまで弱められ
し母音)が、同一子音又は同種の子音の間にあるときは

省略さる。—zusammn = zusammen (Enthlipfis)

b. 省略せる結果生ぜし綴り (Synkope) に於いて、二個
の齒音が衝突する場合、その中の一齒音のみ發音さる。

(er ret = er redet; er rete = er redete; jeret =
geredet; er (ihr) reit = er (ihr) reitet; verbit =
verbittet; er (ihr) pufst = er pufstet, jepufst =
gepufstet; kost = kostet; jekost = gekostet, verrost =
verrostet)

c. **t**, **d** を、早く話す場合に、その發音が抑壓される結果、
こゝに聲音の磨滅作用が行はる。

(koffe mal = kosten sie mal; haffe = hast du sie;
ich finse nich = ich finde sie nicht; du finst =
du findest es; du hefft = du hättest)

d. **werden** は常に短縮さる。

(ich wer[= ich werde], wir wern, ihr wert, sie
wern, 命令形 wer, 現在直説法 wern, 過去分詞
jeworn)

e. **her** と **hin** は短縮される。

(ruff = hinauf od. herauf; rin od. rinner =
herein; rüber = herüber; runter [auch run,
runner] = herunter)

f. 文章上又は文體上よりも亦、語形を短縮する場合尠か
らず。

(obenjehn = hinaufgehen; hinterjehn = nach
hinten gehen; ich wer ma nebenloofen = ich
werde mal neben herlaufen; ich komme jleich

[=gleich] vor. [3. B. in die Vorderstube]

- g. **n** の省略は屢々行はる。(個々の聲音 IV 参照)
(*fuffzen* = *fünfzehn*; *fuffzig* = *fünfzig*; *eema* = *einmal*; *zehma* = *zehnmal*)
- h. 合成語に於いて、互に近似せる子音が隣接する場合、規定語の子音は時々脱落す。
(*Rufasten* = *Guckasten*; *Hustange* = *Huststange*
* *Zuckerstange* für *Kinder*; *Hauschlüssel* = *Hauschlüssel*; *Mustulle* = *Musstulle* ≈ *Musbrötchen*)
- i. 子音の脱落は、尙その他の場合に於いても行はる。
(*Mauschelle* = *Maulschelle*; *Holzstall* = *Holzstall*;
Bustabe = *Buchstabe*; *Hanschuh* = *Handschuh*;
Monschein = *Mondschein*)
- j. **noch** 及び **doch** の **ch** は響かせない。
(*nonnich!* od. *nonnisch!* = *noch nicht*; *zei do ma* = *zeige doch mal*)
- k. **en, nen, ne** はアクセント無き **n** となる。
(*Rejn* = *Regen*; *rejn* = *regnen*; *rejnte* = *regnete*)
- l. **den, ben** は *dn, bn* となり、又時としては **n, m** の短音となることもある。
(*wern* = *werden*; *ieworn* = *geworden*; *ham* = *haben*; *Amt* = *Abend*)
同様に *guten* は *jun* となり、*guten Morgen* を *jun Morjen* と云ふ。又 *eigentlich, ordentlich* を *eintlich* (od. *einflich*), *orntlich* と呼ぶのも亦、此の種の短縮法に属す。

- m. **Atem** は *Atn*, **Gott bewahre!** は *Goppewahre!* と云はれる。後者の如きは、可なり強いアクセントの影響を受けてゐるが、*Spreevald* の方面に於いては、*ge* の *g* が殆んど *h* にまで、弱められてゐるやうである。
3. **Proflise** 及び **Enflise** より來れる語調上の省略。
- a. 語調上の省略には、其外一語のアクセントが次の語に移る即ち **Proflise** によるものと、一語のアクセントが前の語に移る即ち **Enflise** によるものがある。
Proflise の例: 不定數詞 **ein** は *een* と呼ばれるが、*proflitisch* には *en* 又は *'n* となる。
Enflise の例: **denn** は質問の場合 *'n* となる。
Wat kost'n det? = *was kostet denn das?*;
Was soll'n det wern? = *was soll denn das werden?*
- b. 個々の場合
daß は **Proflise** の際、*deß* 又は *det* に變る。
(*Deß er echt ist, wern Se jlooben* = *daß er echt ist, werden Sie glauben*; *Dette still bist!* = *daß du still bist!* 文章論、命令形参照)
Sie は常に *Sie* であるが、**Proflise** 及び **Enflise** の場合 *Se* となる。
sie, die, du は常に *se, de, de* となるが、**n** の前にありては *s, d, d* にまで縮小される。
(*Hatsn* = *hat sie denn* od. *hat sie ihn*; *hastn* = *hast du sie denn*)
zu は *ze* 又は *za* に變る。

(za Hause=zu Hause)

so ein は *sonn* となる。

id は屢々 *t* のみにて代用されることあり。

(Det seht nich in=daß sehe ich nicht ein)

et [=eß], **det** [=daß] は *t* に代ることあり。

ihn, den, een [=ein], **eenen** [=einen] は *n* に、**eene** [=eine] は *ne* に、**heran** は *ran* に轉化する。

habe は *haa* となる。

(Det haaf ihn versprochen=daß habe ich ihm versprochen; haafs dir nicht gleich jesagt?=habe ich daß dir nicht gleich gesagt?)

habe は又 *ha* となる場合もあり。

('d has' da doch jesagt!=ich habe es dir gleich gesagt!)

4. 外來語の揚音。

外來語のアクセントは往々諧謔又は無智より、誤つて用ひられてゐる。

(Conti'ental=richtig. Kontinental'; prozen'tualiter = ritg. prozentual'; Dollar' = ritg. Do'ller; Moto'r = ritg. Mo'tor; Mona'fo = ritg. Mo'naf)

II 文 調

1. 文章語と同じく方言にありても異なる文調を有す。併し乍ら文の内部の抑揚に關しては、語調の如く個々の規定を設けることはできない。茲に唯一の法則ありとせば、それは意味が抑揚を決定するといふことである。即ち強調さるべき凡ての言葉は揚音を有するものと見ればよい。例へば

Unser Fritz brachte mir gestern abend das Buch.

に於いて何れの語を強調しても差支へない。

2. 伯林語の文章の末尾は次の如き二種の文律を有す。



3. 頭韻と脚韻。

- a. 伯林語に於て、押韻傾向 (Reimneigung) が著しく強く現はれてゐる。

(toll bei Kroll=toll [verrückt] bei Groll; Himmelbolle; Zichtjondel = offener Wagen der Elektrischen; Terpentintante 美術學校の若い閨秀畫家が同僚より呼ばれる言葉、Elsoujine とも云ふ)

- b. 頭韻の爲、或は又單に無意味に、*d* を挿入することあり。

(dadran = daran; dadrin = darin; dadruff darauf; wodran = woran; wodrin = worin; wodruff = worauf)

- c. 又 *da* (od. *da'*) なる語は *ma*=*mal* と同様に、好んで用ひる傾向がある。

(*da'* dabei = dabei; Wat is'n *da'* dabei? = was ist denn dabei?; *da* damit = damit; *da* drum

=drum; da darüber=darüber)

d. 綴音の挿入

綴音 en が、唯餘分に挿入されることがある。

(Schmalzenstulle = Schmalzstulle ≈ Zahlung
leisten; Strumpfenband = Strumpfband)

これは最強揚音と次揚音との間に媒介綴音を置いて、律動的感情を出さしめんとせる語の構成法である。

Ein Berliner Colporteur.

(E. Jacobson und H. Salingré.)

Regierungsrats Auguste: Herr Louis, Sie sind ein sehr gebildeter Mann.

Louis: Ja, die Bildung ist mit meinem Stand als Colporteur eng verwoben.

Kanzleirats Fette: Denn werden Sie uns noch sagen können, wer Schiller war.

Louis: Schiller? Sie kennen Schillern nicht? — Schiller ist — der hat — aber ich bitte Ihnen — Schiller det ist — wo am Gensdarmen-Markt die vier Lichter um 't hölzerne Zitter brennen!

第五 章

語の形式論 (Formenlehre)

第一節 名詞的品詞の變化 (Declination)

I 名詞の格

1. 第一格

第一格は明瞭に認むることを得。唯次の如き語の用法に於いては、第一格なるや第四格なるやを識別する事能はず。

'n Bittern ist sehr gut für'n Magen = einen Bitteren od. ein Bitteren [Bitteren なる第四格を第一格化せる語と看做す] ist sehr gut für den Magen. ('n Bittern ≈ Schnaps)

2. 第二格

第二格は全然缺如す。一般に第二格は第四格に von を附して表はす。

(der Vater von den Jungen = der Vater der Jungen; der Häupter von't [=von dem] Ganzen = der Haupt [≈ Anführer] des Ganzen)

物主代名詞の助けを藉りて、第二格を示すことあり。

(Wem od. wen sein Gut? = wessen Gut?; Treten ihr Bruder = der Bruder Gretchens; det ist den Berliner sein Fall = das ist der Fall Berliners. od. das ist bei den Berlinern der Fall)

§ を附して第二格を作る場合は、例外として有り得る。
—— Lehmanns Rutscher

3. 第三格

第三格の形は唯代名詞にのみ存在す。

第三格を用ふる場合は、氣取つて云ふときか又は戲詩などに限られてゐる。

(Wir sind Gott sei Dank so gestellt, daß wir auf dem Felde nich sehn brauchen = wir sind Gott sei Dank so gestellt, nach Gelde nicht sehen zu brauchen.; Kein Verjüngen ohne den Damens, aber mit die Damens jeh't's in dem Felde = kein Vergnügen ohne Damen [od. Dame], aber mit Damen geht es in das Geld)

4. 第四格

第三格と第四格とは區別することはできない。此の二つの格は共に第四格とも呼ばれてゐる。

5. 呼格(第五格)

人名を呼ぶに呼格語尾 (Ruf-Endung) を用ふることあり。

(Hanne = Hans; Lede = Alex; Miele = Emil)

呼懸けの場合の du は do, Sohn は Sohnemann といふ。後者は又人名に對しても適用さる——

(Hansemann = Hans; Mutemann = August)

6. 冠詞の省略

第三格の名詞は原則として存しない故、第三格の冠詞も前置詞の後にありては、往々省略さる。

(uf Straße = auf der Straße; nach Schule =

nach der Schule; nach Kirche = nach der Kirche)

7. Vater, Mutter 及びその他の親族名 (Bruder, Onkel 如き) は固有名詞の如くに取扱はれ、次の如く變化する。

一格	Vater	Mutter	mein Bruder
二格	Vatern sein (mein' Vater[n] sein)	Muttern ihr (meine Mutter[n] ihr)	mein' Bruder[n] sein
三格 四格	Vatern	Muttern	mein' Bruder

8. 名詞の諧謔的變化

學生などは往々諧謔的に名詞を變化する場合あり。

(der Lach, des Laches, dem Lach = Dämlach 即ち Lach は漆であるが、第三格は Dummkopf と相通じて馬鹿の義となる。)

II 名詞の數

I 複數形は次に列擧する如く、種々な形式を有す。

1. er の語尾を附するもの。

(Dinger = Pl. Dinge ≈ Unsinn od. Ohrfeige; Drecker ≈ Schmutz; Eser = Pl. Aser; Kleber = Pl. Klöße ≈ Bauklöße; Resten = Pl. Reste ≈ Reste von Stoffen; Steener = Pl. Steine; Viecher = Pl. Viehe; Menscher = Pl. Menschen ≈ Frauenzimmer [複數の意味を有せず])

2. § の語尾を附するもの。

(Bengels = Pl. Bengel; Bummlers = bummelnd

Gehenden; Damens=Pl. Damen; Freileins=pl. Frau'lein; Froschens=Pl. Groschen; Kinderfens=Pl. Kindehen; Meechens=Pl. Mädchen; Onfels=Pl. Onfel; Raders=Pl. Rader
 ~ ungezogene Kinder)

複数形に通ぜざる人は、往々 s を附して誤つて複数形を作ることあり。——Kochs を Köche に代りて用ふるが如し。

zu Müllers, zu Schulzens (何れも人名) の s は複数形にして、アングロサクセン語の第二格 s ではない。

英語の近世文化語の複数形 (Films, Klubs, Hotels, Streifs 等) の影響を受けて s を附加する語もあり。

(Blocks=Pl. Blöcke; Parks=Pl. Parke od. Parcs; Diners und Frühstück's=Pl. Diners und Frühstücke; Wieviel Schnitt's=wieviel Schnitte)

ander Leitens [=anderer Leute] なる二格に注意を要す。

(Ich wer mir um ander Leitens Kinder kümmern!=ich werde mich um anderer Leute Kinder [=die Kinder anderer Leute] kümmern!)

3. n の語尾を附すもの。

(Banken=Pl. Bänke; Fenstern; Fingern; Knieen; Messern; Pantoffeln; Stiebeln=Eq. Stiefel; Wurschten ~ dicke Armchen; Zelten)

4. ers, ns (二重語尾)を附するもの。

(Dingers←—Dinger=Pl. Dinge; Hoppeifens←—Hoppeifen ~ Pl. Sachen)

5. 曲音となるもの。

(Arme=Pl. Arme; Däume=Pl. Daumen; Büunkte=Pl. Punkte)

6. 曲音とならぬもの。

(Lause=Pl. Läuse)

7. 誇張的複数形。

(Morgende = Pl. Morgen; Jahrende = Pl. Jahre; Det kannstest nich in Jahren jutmachen, janichma in Jahrende !=das kannst du nicht in einem Jahre gutmachen, ja nicht einmal in Jahren)

8. 諧謔的複数形。

この複数形は主として、南獨逸の戯曲、例へば Fledermaus 等より出でしものである。

(Balkonger = Pl. Balkons; Salonger = Pl. Salons; Geschmäder=Pl. Geschmäcke; Publikümmer = Pl. Publikum; Kompötter = Pl. Kompotts; Saläter=Pl. Salate; Paletöter=Pl. Paletots; Omnibuster=Pl. Omnibus)

9. 複数形の單數名詞と常用的複数名詞。

Bimse; Saue; Reile; Kloppe; Schimpfe; Simse; Stauke; Stripse; Walke; Wamse (何れも Schläge の意)。これ等は女性名詞としては單數

(Die Bimse hat gezogen.)

Amerikaner ≈ bezuckertes pfannkuchenartiges Gebäck; Kameruner ≈ braunes Konditorgebäck; Klossen ≈ Holzpantoffeln 等は常に複数の意味に用ふ。

II 數に關係を有せざる語尾。

1. 名詞の中には唯單に尾音に e を附するものあり。

(Bahne; Banke; Geschichte = Geschichte; Stüde = Stücke; Uhre——聲音論第三節個々の聲音参照)
特に、このことは小供の言葉の中に多く見出さる。

(Soldate; Musikante ≈ Zieraffe)

2. 短き人名にも亦 e を附す。

(Mute = August; Ede = Eduard; Friße = Friedrich; Maxe = Max; Rante = Ferdinand; Otte = Otto; Paule = Paul; Karle = Karl [發音 Kaale])

遠くにゐる人を呼ぶ際、e を擴張して強く響かす故 ä 音となる。

女性名詞を従へざる數詞にも亦 e を附して數へる。

(eene = eine; zwee = zwei; dreie = drei)

III 名詞の性

方言性は文章語の性と異なる場合あり。

1. 男性名詞となる語。

(Armband [中]; Band [中] ≈ Binde; Barometer [中] od. [男]; Brech [中] ≈ Unfirt; Blei [中] ≈ Bleistift; Brosch [女] = Brosche; Bund [中] 束; Datum [中]; Examen [中]; Halstuch [中]; Jas [中] = Gas; Gehalt [中]; Gummi

[中] od. [男] = Gummi; Kaleifa [中] od. [男] ≈ Spaß; Katheder [中] od. [男]; Viter [中] od. [男]; Meter [中] od. [男]; Mus [中]; Neegen [女] = Neige; Öl [中]; Petroleum [中] = Petroleum; Pult [中]; Real [中] = Regal; Seidel [中]; Sieb [中]; Soffa [中] = Sofa; Streichholz [中]; Telephon [中]; Thermometer [中] od. [男]; Trikot [中] od. [男]; Tuch [中] 服地の意味に於て; Wachs [中]; Weihnachten [Pl.] 具體名詞、贈物の意味に於て; Bed [中] ≈ übermütiges Gebahren)

獨逸語をマスターすれば、性は感じて識別出来るが、その感じも往々にして誤ることありとすれば、それは中性名詞の中、男性的色彩を帯びてゐる語、又はそれと逆の場合が特に著しい。

2. 女性名詞となる語。

(Alte [中] = das Alter; Droppe [男] = Tropfen ≈ Schnaps; Finke [男]; Glide [男] = Flic od. Gliden; Hade [男] = Hade ≈ Ferse; Hafe [男] = Hafen; Karpe [男] = Karpfen; Rinne [中]; Rniee [中] = Rnie; Rolbe [男] = Rolben; Rorne [中] = Korn; Lappe [男] = Lappen; Muffe [男] = Muff; Rabe [男]; Schauerlappe [男] ≈ Auswischlappen; Schliße [男] = Schliß)——此等は女性名詞語尾 e を附加せる爲、或は語尾 n の脱落の爲に生ぜし性の錯誤である。

其他文字の名稱に女性を用ふる場合あり。

(die *U* is zu groß = das *U* ist zu groß; Meine Juste lernt jetzt de [=die] franzeesche *U*. = Meine Justine [女名] lernt jetzt das französische *ABC*.)

3. 中性名詞となる語。

(Bleistift [男]; Cheeselong [女] = Chaiselongue 凭り所のないソファー形の寝臺兼用椅子; Docht [男]; Draht [男]; Efel [男]; Klinik [女] = Klinik; Kee [女] = Queue; Lohn = [男][中]; Monat [男]; Müll [男][中]; Ohrring [男]; Sarg [男] = Sarg; Schnur [女]; Siejellack [男][中]; Singuhr [女]; Strid [男] ≈ übermütiges Kind; Würm [男] ≈ mitleidig für ein hilfloses Wesen; Zed [男] ≈ ein Lauffpiel)

IV 代名詞

1. 人稱代名詞

a. 人稱代名詞は單數に於て次の如く變化す。

第一格	id	du	er	sie	et
第二格	缺 如				
第三格	mir	dir	ihm	ihr	et
第四格				sie	

純粹の伯林人は *mir* と *mich*, *dir* と *dich* を顛倒して用ひ、又は隨意に之を使用するものの如く考へてゐる人もあるが、それは誤れる見解である。彼等は元來 *mir* と *dir* の用法のみを知り、三格及び四格の區別を認めな

い。(mir はアクセントのある際は、*mia* 又は *wia*, アクセントの無いときは、*ma* 又は *wa* といふ)。唯教養ある人々にして伯林語を模倣して話す場合に初めて、*Mischmasch* が行はれるのである。併し乍らそれは *barbarisch* であつて、決して *berlinisch* ではない。「Der Berliner sagt immer mir, ooch wenn't richtig is = auch wenn es richtig ist」である。

b. ide.

ide は *id* [=ich] に代り、絶對的形式として用ひられ、動詞を決して伴はない。佛語の *moi* の如し。

(Wer is denn da? Ide!; Was wie ide? 君は僕の事を云つてゐるのかい)

c. du.

due を *ide* の如く使用する場合は極めて稀である。

do は *du* の呼格にして、威嚇的に用ふることが多い。

de は前の語のアクセントが、*du* に影響せる場合に用ひらる。

d. ihm.

ihm は本來の伯林語にはなく *Wien* の道化芝居より傳來せる語であつて唯若干の成句に於てのみ用ひらる。

(Haut ihm! = zieh ihm die Haut ab!; hat ihm schon! = die Sache ist schon gemacht.)

e. sie, ihr, Ihnen, Sie.

sie は複數、三人稱、第三格の *ihnen* の代りとなる。

(Haste se denn wat mitgebracht? = hast du ihnen denn was mitgebracht?)

ihr は又時としては **ihnen** を代用す。

(*Ich hab't ihr ofte gesagt, aber se heren nich. = ich habe es ihnen oft gesagt, aber sie hören nicht.*)

Ihnen (第三格及第四格) は、呼稱としての **Sie** に代ることあり。

(*'t ha't Ihn' ja gleich gesagt! = das habe ich, Sie, ja gleich gesagt!* おい君! そのことは今云つたぢやないか; *Ihn' meen't ja janich! = Sie meine ich ja gar nicht.*)

Sie は前置詞の次に位するとき **Ihnen** に代る。

(*Ich bin mit Sie janich zufrieden = ich bin mit Ihnen gar nicht zufrieden.*)

2. 物主、疑問、関係、指示代名詞

a. 物主代名詞

unser は女性にありては **unse**, 第三格第四格は **unsen** となる。

b. 疑問代名詞

wer の第四格は **wem**, 第三格は **wems**, **wemst**, **wem sein**, **wems sein**, **wemsten sein** となる。之に答へる場合は **meinen sein**, **seinen sein** 等と云ふ。

(*Wems Gut is'n det? = wessen Gut ist denn das? Antwort: mein(en) seiner*)

c. 関係代名詞

welcher は関係代名詞としては用ひられず。関係代名詞となるものは **der** のみである。

dessen は **den sein(e)**, **deren** は **den ihr(e)** と云ふ。

d. 指示代名詞

dieser 及び **jener** に代つて **der hier** 及び **der da** といふが如き、佛蘭西語に似たる用法もあるが、それは偶然の一致で、直接の影響と認むることは出来ない。

V 形容詞

1. 形容詞は複数形に於いて名詞も冠詞も無く、單獨に用ふる時は、普通、語尾 **en** をとる。冠詞と名詞との間にある場合は語尾 **e** をとる。

(*Det sind ja alten = das sind ja alte; Die neie Kartoffeln sind ma lieber = die neuen Kartoffeln sind mir lieber; Kooffte nich bald neien? = kaufst du nicht bald neue?; Gibt es nich schon friehe roten? = gibt es nicht schon frühe rote? 赤芋(大根…)の走りはないかね*)
ander は形容詞の場合、概ね語尾を缺く。

(*Die ander Sorten schmecken nich = die anderen Sorten schmecken nicht*)

weiße は名詞となりては、**Glas Weißbier** を意味す。従つて二杯の白葡萄酒を **zwee Weißen** と云ふ。然るに看板などに往々 **zur guten Weißen** (上等白葡萄酒は)なる廣告を見ることがある。

so ein は女性名詞に於て **sonn** となり、複数は一一般に **sonne** といふ。

ionne Brieder = solche Brüder; 形容詞の前に於ても亦 **sonne** を用ふ: **sonne demliche Wiße = so eine [=solche] dumme Wiße**

2. 形容詞又は副詞に語尾 e を附すること多し。

(dicke = dick; dinne = dünn; feste; helle; heile;
 gewohne = gewohnt; viele od. fuhl = fuhl;
 fleene = klein; reene = rein; scheene = schön;
 stille; jerne = gern od. gerne; ofte = oft;
 sachte = sacht od. sachte; sehre; vorne = vorn od.
 vorne; —Man nich so dicke ran = man darf
 nicht so dicht heran.; scheene raus! = fein
 heraus!; Er is dicke durch ∞ unten durch;
 feste mang! しつかりやれ [喧嘩の時などに使喚す
 る言葉])

VI 數詞

1. 單獨に使用せる數詞の中、2 から 12 迄は語尾 e をとる。但し sieben は例外である。又 zwei 及び drei に e を附することも稀であるが、物を算へるときは必らず zweee, dreie と云ふ。

viere lang は n の脱落ではなく、e の添附せる不變化の形式である。

2. 數詞(基数)は原則として變化せざるも、時刻を附して用ふる際は必ず變化する。

(um [Uhre] fünfven = um fünf Uhr; um
 eenßen [= um ein Uhr] より um zwölfen [=
 um zwölf Uhr] 迄はこの變化に従ふも、um neune,
 um zehne, um zweie に於ては n を附せず)

第二節 比較級 (Steigerung)

1. 形容詞の中には比較級に於て、曲音となるもの多し。
 (glatt—glätter; rasch—räscher; doll—döller
 [toll]; ober—oberste [最上級])
2. 不規則的な比較級を作るもの。
 (nah—nejer = näher; hoch—hejer = höher;
 schree—schreejer = schräger)
3. 特殊的な最上級を作るもの。
 (die mehrsten = die meisten; der zehnteste = der
 zehnte [アクセントを有する場合]; —Du hast ja
 so recht; ja sogar sentrecht. [大學生の氣取つて
 用ふる言葉])
4. 諸語的比較級。
 (Mai—Meier [番頭]—Meister [親方]; Leer—
 Lehrer—Oberlehrer; Schlecht—Schlächter [屠殺
 者]—Schlechtermeister; —Leichenwagen の Kom-
 parativ は何か? 答: Leichner Wagner といふ。
 意味: Kommerzienrat Leichner 氏が樂聖 Wagner
 の記念碑を建てたから)

第三節 動詞變化 (Konjugation)

I 強變化動詞の變化形式

1. 動詞の不定法の語幹に **e** を有する場合、**e** が **i** に變化せざることがある。

(Du **e**ßt=du **i**ßt; er **e**ßt=er **i**ßt; er **fr**eßt=er **fr**ißt; du **se**hst=du **si**ehst; er **se**ht=er **si**eht)

命令形に於ても亦同様である。

(**e**ß, **se**h, **he**lf, **br**ech=**i**ß, **si**eh, **hi**lf, **br**ich)

2. 現在形に於いて、文章語同様に **e** が **i** に變ずる語あり。
(geben [=geben], **ge**sch**e**hn [=ges**ge**hehen], nehmen; werden 等)

命令形にありては一定せず。

(**ge**be と **gi**b, **neh**me と **nimm** は併用さる)

3. 複數二人稱の變化。

伯林語に於いて、複數の二人稱文は特に、文章語と同様に形成せんとする傾向が著しく現はれてゐる。

(Ihr **i**ßt; ihr **si**eht; ihr **gi**bt; ihr **nimm**t)

4. 曲音の不定。

a と **ä**, **au** (oo) と **äu** (ö) との曲音關係は不定である。

(Du **dr**agst=du **tr**ägst; er **dr**agt=er **tr**ägt; du **loo**ffst=du **lä**uffst; du **sto**ßt=du **st**ößt; —之に反し du **f**äßt=du **f**aßt; er **f**äßt=er **f**aßt 但し lassen は er **l**aßt と云ふ)

ⓘ 及び **r** は共に **a** 音を有し、曲音を妨害す。

(Er **f**allt=er **f**ällt; er **h**alt=er **h**ält; 但し二人稱複數は、上述せる如く例外をなす——ihr **f**ällt;

ihr **f**ällt;—er **f**ahrt [時には er **f**ährt])

其他、et **f**angt **l**os=es **f**ängt **l**os; wir **m**üssen [時には wir **m**üssen]。es **j**elt は es **j**ilt と併用さる。

II 過去分詞

1. 弱變化動詞は屢々強變化過去分詞形をとる。

(**je**beten=**ge**betet←—beten; **je**forben←—farben; **je**hoften←—heften; **je**orben←—gerben; **je**litten←—läuten; **je**malen←—malen; **je**morken←—melken; **je**schonken←—schenken; **je**schumpfen←—schimpfen; **je**spiesen←—speisen; **je**wunken←—winken; **ve**rechen←—verjähren; **ve**ruften←—vergiften)

2. 諧謔的に強變化過去分詞に倣ふ場合。

(**bl**amoren=**bl**amiert; **je**zogen=**ge**zeigt; **ü**berzeugen=**ü**berzeugt; **um**jebrungen=**um**gebracht; **ve**rrissen=**ve**rreißt; **ve**rzohren=**ve**rzehrt)

3. **st**echen=**st**ecken, **p**feifen, の過去分詞はそれぞれ **je**stochen=**ge**stecht, **je**suffen=**ge**piffen となる。

(Die Lampe wird **an**jestochen=**an**gestecht)

III 助動詞の特殊變化

derfe**n**=dürfen, 過去 **de**rftest, 過去分詞 **je**derft

(**ic**h **de**rf od. **d**ürf; du **de**rffst; wir **de**rfe**n** od. **de**rfe**n**)

mechte**n**=mögen.

(**De**t hätte **ic**h **me**chte**n** **se**hn=**da**s hätte **ic**h **se**he**n** **m**öge**n**)

muffen と **müssen** とは併用さる。

find = sein (不定法命令形の場合)

これは **wir haben**, **wir gehen** 等の動詞の不定法形に於けるが如く、**wir find** をも亦不定法と看做せしに因る。

(**Laß** det **find!** = **laß** das sein!; **Sind** Sie **stille!** = seien Sie still!)

sich haben [= sich zieren] の場合は、單數現在二人稱に **habst**, 三人稱に **habt** を用ふ。(聲音論、語調、3 参照)

(Du **habst** dir; er **habt** sich)

jetwor(de)n = worden (聲音論、語調、2 参照)

(**Yestern** **sind** se **jetraut** **jetworden** = **gestern** **sind** sie **getraut** **geworden**.)

brauchen の三人稱、單數の變化は助動詞 **soll**, **muß** 等を模倣し、原則として **t** を附せず。

(**Darum** **brauch** er **donnich** **gleich** **haun!** = **darum** **braucht** er **doch** **nicht** **gleich** **zu** **hauen**; 例外: **er** **braucht** **Geld** = **Geld**.)

第六章

語の構成論 (Wortbildungslehre)

I 語尾

a. 抽象的女性名詞にして、形容詞より派生せる語は屢々 **de** に終る。

(**Dicke** = **Dide**; **Fernde** = **Ferne**; **Seechde** = **Söhe**; **Längde** = **Länge**; **Wärnde** = **Wärme**; **Mengde** = **Menge**)

尙、抽象名詞の特殊的構成を示せば、次の如きものがある。

(**Alte** = **Alter**; **Benehme** = **Benehmen**; **Bleibe** = **Obdach**; **Ziehe** = **Pflege**; **Traute** = **Mut**; **Verlangste** = **Verlangen**; **Verstehnte** = **Verständnis**; **Bernimm** = **Bernunft**)

b. 若干の語は語尾に **s** 又は **ft** をとる。

(**Dings** = **Ding**; **statts** = **statt**; **aberst** = **aber**; **schonst** = **schon**; **zwarst** = **zwar** — **allens** = **alles** [n 挿入])

c. 縮小綴は唯 **ken** を附して構成さる。例外は **Meechen** = **Menschen**; **Meilein** = **Fräulein**; **Wehwehchen** = **Weh** [嬰兒に對して用ふ] だけである。**ken** の前に好音上 **e** 又は **s** を挿入することあり。

(**Bliesenken** = **Blümchen**; **Jungenken** = **Jün-**

gelchen; Edsken = Edchen; Endsken = Endchen;
Häppsken = Häppchen; Stidsken = Stückchen)

形容詞及び副詞も亦縮小され、ken を附する場合あり。

(Mlekken ≈ Frau; sachtelen ≈ behustam; scheenek-
ken ≈ gut, schön!; sehreken = sehr; leiseken =
leise; jeschwindelen = geschwind; stilleken = still
— Raffke [インフラチオン成金]も亦この種に属す。)

d. 不變化詞の形容詞化。

不變化詞が形容詞として用ひられる際、ig の語尾は敢
へて強要されず。

('ne zue Droschke = eine zugeschlossene Droschke;
anzweee Stiebeln = entzweigerissene Stiefel; 'n
extra'n Seidel = ein extra bestelltes Seidel; 'ne
durch Furke = eine kräftige gesäuerte Gurke;
'n aufet Buch = ein vollgeschriebnes Buch;
raube Dogen = herausstehende Augen; der ofte
Wechsel = der oftmalige Wechsel; 'ne sehre Bad-
pfeife = eine sehr kräftige Badpfeife; 'ne abbe
Ecke = eine abgestoßene Ecke; 'ne recht zurüde
Tulpe = 'ne recht zurückbleibende Tulpe; Die
außerhalb'schen Furken doogen nisch. = die
außerhalb kommenden Gurken taugen nicht;
die driebenschen Leute = die drüben wohnenden
Leute)

それと同時に ig の語尾をとる形容詞的用法の存するこ
とは云ふ迄もない。

(znig = zugeschlossen; anzweeig = entzweigebrochen
od. defekt; kaputtig ≈ defekt [kaputt に就いて
は第十章参照。])

e. gastieren の語尾模倣語。

俳優の gastieren (他の座へ出演すること) の語に倣つ
て、職人などは、名詞に ieren を附すことあり。

(doktorieren = Doktor werden; kellnerieren;
schlosserieren; hausieren; baronieren ≈ stel-
lungslos sein)

f. 副詞語尾 =weise は、好んで使用さる。

(schließlicherweise = schließlich)

g. 其他の語尾

(jeweignlich = gewöhnlich; sich verspetijen =
sich verspäten; sich jeduldijen = sich gedulden;
Benehmijung = Benehmen; meinigte = meinige;
vorigte = vorige; barfbeenig = barfuß [Fuß (=
Bein) の f の留保せる形])

II 合成語 (Komposita)

machen の合成語は、單一動詞の代りに用ふ。

(ufmachen = aufmachen [für öffnen]; zumachen
[für schließen]; anmachen [für befestigen])

合成語の中には故意的に作られしものもある。

(loßfangen [= losgehen + anfangen]; nichts-
destotroß [= nichtsdestoweniger]; troß und
alledem [= troßdem]; kurz und lang [= gut];
lebensmittelmäßig [戦時、食糧品の制限分配が行

はれし事實に因み、「此頃景氣はどうだい」と聞くが如き場合に「相變らず制限分配的だよ」と答へる)

verhöhnepiepeln [= verhöhnen + piepeln]; irapfchen [= greifen + raffen] は特殊な合成語にして、意味は前語にあり。

mir roochert [~ich möchte gern rauchen] は mir durstert = mich durstet を凝して造れる一種の合成語的用法である。

III 特殊語形

1. 強勢語形 (Intensivum), 反覆語形 (Frequentativum)
jächtern は jagen の強勢語; — drängeln は drängen, quazeln は quatschen の同義的反覆語である。

2. 延長語形の一例

(Kakauzle = Kautz; Mentenke [←mengen] ~ Geschicht 作り話)

3. 名詞の形容詞化

(dufte [←Duft] ~ roh; klatte [←Klasse] ~ schön gewachsen od. schön riechend u. s. w.; puppe [←Puppe] = sehr fein; sache [←Sache] ~ schön)

之に反し、形容詞も斯の如く無意識に名詞化することもないではない。— Bange [←bang] ~ Furcht

4. 頭字連結法

(Bedag = Berliner Elektrische Droschken-Aktien Gesellschaft [現在無し]; Sipo = Sicherheitspolizei; L L L = laufig lange Leitung 悟りが鈍い; B. Z. = Berliner Zeitung od. bin zufrieden od. bitte zahlen!)

IV 外來語式構成語

外來語の伯林語への影響に就いては、既に伯林語概説の中に述べた所であるが、更に個々の場合に於ける語の構成に就いて若干考察してみよう。

a. 佛語式構成語:

Pluftjee は、佛語語尾 ier を以て作りし、Portier を模倣せし語。Kleiderhändler を意味す。

Ruge-muge は佛語 pêle-mêle の模倣語にして、Tohubohu 即ち混亂を意味す。

Schorle-Morle は佛語 toujours l'amour [zu-trunk] を歪曲せる造語である。

b. 日耳曼語式構成語:

動詞の幹母音變化と頭韻法に於て、日耳曼語に近似せる語がある。

(Wirr-warr ~ Lärm; Misch-Masch ~ Gemisch ohne Wahl)

c. 羅典語式構成語:

羅典語式構成語には模形語式(外國語式變化をなせる獨逸語)、混成語式(兩國語の漫然たる組合せ)等がある。

(Luftikus ~ leichtsinniger Mensch; ex faustibus ~ aus der Hand, ohne Messer und Gabel (essen); Mittelmum ~ Mittelmaß [nach Analogie von Maximum und Minimum; Müllersche [Müller] には羅典語尾 -isca を含む; Schaufelbus ~ Autobus; zidzadzive ~ sukuzesive 連續的)

d. 希臘語式構成語:

希臘語には所謂百姓讀みに屬するものが多い。

(Komifier = Komifer; Optifier = Optifer;
melanflötrig = melancholisch; Phantadu =
Phantafie)

e. 伊太利語式構成語:

諧謔的に伊太利語を用ふる場合あり。

(futschifato ≈ verloren; pico-bells ≈ sehr fein)

f. Ukafa [=uns kann keiner] なる略語はメキシコ語

の音を模倣せるが如し。

Sprechübungen.

Die Katze tritt die Treppe krumm. — Violetta läßt nett, nett läßt violetta. — Plettbrett. — Klein klein Kind kann kein' klein' Kirschkern knaden. — Wir Wiener Waschweiber wollten wol weiße Wäsche waschen, wenn wir wüßten, wo weiches, warmes Wasser wär. — Konstantinopolitanischer Dudelsackfeisenmachergefelle. — Der Potsdamer (Cottbusser) Postkutschcher pußt den Potsdamer Postkutschkasten.

第七章

文章論竝に文體論

(Syntax und Stilistik)

文章論も文體論も、歸する所は Bedeutungslehre 並に Sprachphilosophie に屬する問題であつて、伯林語も亦此等の問題に寄與せし所尠くはない。

1. 尊嚴的複數形

複數形を用ひて尊嚴を表はす所謂 Pluralis Majestatis は伯林語にも存在する。

(Wir sind helle ≈ wir sind klug; Uns kann keiner ≈ uns kann nicht so leicht niemand etwas tun; wie wir jebaut sind ≈ Leute wie wir sind)

2. 動詞の格支配——語の形式論の格、名詞的品詞變化参照。

文章獨逸語に於ける第二格支配の動詞は、伯林語にありては、第四格又は前置詞と結合す。何となれば、第二格を力強く捉へず、單に之に觸れてゐるに過ぎないからである。

(Er nimmt sich det Kind nich ordentlich an = er nimmt sich seines Kindes nicht ordentlich an; Scheem dir mit deine Faulheit = schäme dich deiner Faulheit; Ich kann mir nich uff ihm besinnen = ich kann mir nicht auf ihn besinnen od. ich kann mich seiner nicht erinnern; Ich

habe ihn netig=ich habe ihn nötig=ich bedarf
seiner)

併し此の點は近世獨逸語の一般的傾向にして、敢へて異とするに足らない。唯中央高地獨逸語には二格支配の動詞が豊富なりし爲、この用法は今尙殘存してゐる。

二個の言語形式に於ける二種の思想が、同時的に成長せるものがある。例へば begegnen と treffen との如き語にして、この場合往々兩語の混態を見る。

(Ich habe ihn bejenet=er hat mir begegnet. od.
ich habe ihn getroffen)

自動詞が慣用語句に於いて、他動詞の如く内在的補足語をとることあり。

(Das staupte Badobst=das stauft du Bad=
pflaume. 驚いた)

動詞の人稱代名詞支配に就いては、語の形式論に於いて論及せし所であるが、之を要するに三格と四格とを別個に取扱ふ場合は、術學的、技巧的若しくは他の地方の郷土的色彩を多分に帯びてゐるものと解すべきである。

(Er is ganz veressen uff mir, dir, se, ihn, cene
Sache=Er ist ganz veressen auf mich, dich, sie,
ihn, eine Sache)

3. 接續法

定動詞現在形の接續法、例へば er rufe, habe gerufen, werde rufen の如き用法は存在しない。此の場合直説法を以て、簡単に之に換へる。

定動詞過去形の接續法も、凡て助動詞以外は用ゐられない。併し hätte können, hätte sollen の場合は konnte

haben, sollte haben といふ。

(Det konnteste dir jedacht haben=das hättest
du dir denken können; Det sollt ic man
jetuoft haben=das hätte ich nur wissen sollen)

hätte は他の助動詞及び動詞の不定法と共に、完了形を作る場合、助動詞と不定法の語位は倒置す。

(Det hätt ic mechten sehn=das hätte ich
sehen mögen; det hätteste ja gleich konnten
sagen=das hättest du ja gleich sagen können)

4. 命令法

強調命令法は **daß du** を以て作る。

(dette gehst! [=daß du gehst]=geh doch! 行け
と云へば!)

5. 接續詞

接續詞の中、注意すべきものは次の如し。

ehr=ehe od. bevor

weil od. **derweile** [發音: deaweile]=während

derweile [發音: daweile]=doch od. ob schon

(Der ret immer, derweile wa er janich bei=
der redet immer, ob schon war er gar nicht bei)

zeit=seit

(zeit zwoe Dage=seit zwei Tagen)

indem=da—但し da も用ひらる。

(Ich warne hiermit jedermann, indem ich für
nichts aufkomme.)

knapp=kaum

(knapp is er de Diere raus=kaum ist er aus der Tür hinaus)

um det od. **um damit daß** [後者の方、リフ、インされた形]=damit

(Det ha 't dir nich jegeben, um dette 't anzweemachst=das habe ich dir nicht gegeben, damit du es entzweimachst)

so wie=wie (比較文章又は短縮副文章に於いて)

wie=als (比較級のときの wie は又 als wie と云はる)

(scheener [als] wie du=schöner als du)

6. 疑問詞

Wat?=Wie?

wat=warum

(Wat bist'n überhaupt herjekommen?=warum bist du denn überhaupt hergekommen?; wat siekst'n?=warum guckst du denn?)

wat=nicht wahr

(Det wa fein—wat?=das war fein—nicht wahr?)

wat は一語の意味を強める爲にも用ふ。

(wat nu der Schutzmann is=der Schutzmann ist nun.....; mein Bruder, wat der Schlosser is=mein Bruder, der Schlosser ist.....)

wo=was

(ach wo!=ach was! そんなこと聞きたくない;

i wo!=keineswegs! そんなことあるものか; Wo

werf'n so dumm find!=was [=wie] werde

ich so dumm sein!; das beste, wo man hat= das beste, was man hat)

wo so od. **w:dran denn**=wie so

worum=warum

wenn od. **wenn ehr**=wann (但し直接疑問の場合)

wenn er det=wann (間接疑問の場合)

obste=ob du; **wennste**=wenn du

(Obste nich mitkommst?=ob du nicht mitkommst?) 伯林の子供は好んでこの間接疑問形を使用したがる。

(Ob Se mir nich sagen können, was de Uhr is?=ob Sie mir nicht sagen können, wieviel Uhr es ist?)

7. 挿入文

挿入文は特に伯林人に愛用さる。例へば sagt er, hat er jesagt, sagt mein jener, denkt er 等である。

nich od. **nich wahr**=nicht wahr は驚くべき程使用されてゐるが、多くの場合、殆んど意味を失つた一種の疑問形となつてゐる。日本語の「ね」に相當するものと解してよい。次にその甚だしき一例を擧げてみる。

(Wat nu mein Bruder is—nich—det sehn—nich—nu uff ihn los—nich ≈ mein Bruder, das sehen, und auf den andern losgehen [war eins])

8. 未來形

未來形は過去の事實を生けるが如く表現せんとする場合

に往々用ひらる。

(Nu wer'k den Kerl nachloofen und wer'n eene runterhaun = nun habe ich den Kerl nachgelaufen und habe ihm eine [od. eins] heruntergehauen [Ohrfeige geben の意]; nu fangt er an ze schimpfen = nun fangte er an zu schimpfen)

9. 現在完了、過去完了

獨逸語の會話にあつては、過去の時稱は現在完了を以て示すのが原則となつてゐる。伯林語も亦此の原則に洩れないが、場合によつては現在完了の代りに過去完了を使用することがある。

(Ich war ebend erst dagewesen = ich bin eben erst dagewesen)

10. 受動形

受動形は能動形を以て現はされる場合がある。

(Hast se dir gesehn? = haben sie dich gesehen?
~ bist du gesehn worden?)

伯林語のみならず、他の方言にありても、接續法、受動形、過去形等は、文章獨逸語の形態を離れて、出來得る限り清新にして潑刺たる表現に努力してゐる。其れ故、又一方間接話法等に於いては、その意味特に不明確となる譏りは免れ得ない。

11. 不定法

brauchen は助動詞として用ふる場合、zu をとらないのが原則である。

(Det brauch ich nich dun = das brauche ich)

nicht zu tun——但し前置詞としての zu は用ひらる: Er braucht et zu't Lesen = er braucht es zum Lesen)

haben は之に反し、常に次の如き用例に於ては zu と結合する。

(Du hast da wat ze sihen = da hast du etwas zu sihen; wat hast'n da ze stehn? = was hast du denn da zu stehen?; ich habe keen Geld ze liejen = ich habe kein Geld zu liehen)

12. 前置詞

vor od. **for** = für

lang = entlang.

in = ein; **uff** = auf

ehr = vor [時々用ひらるゝ形]——Ehr Mittwoch kann ich nich kommen.

um = wegen—Um dir hab ich Reile gekriegt! = wegen deiner habe ich Reile gekriegt!

von wejen = inbetreff

mang = unter [darunter gemengt を意味す]——

Da ist ja Wasser mang = da ist ja Wasser darunter; steh donnich immer stille mang de Seite = stehe doch nicht immer still unter den Leuten.

mang de Linden [= Unter den Linden] は作られし言葉にして、俗語より生じたものではない。mang は佛

語の **parmi** (**sous** にあらず) に該当する。

bei = zu (但し次の如き文例に於いて) —

Ich geh bei Schulzens, komm bei Herrchen! =
ich gehe zu Schulz, komm zum Herrchen!
[Herrchen は Hundebesitzer の自稱]

zu Hause = nach Hause [但し併用さる]

samt = mitsamt

statts = statt — **statts ide** = statt meiner

mit ohne = ohne [稀に用ひらる] — n' Glas Selter
mit ohne Himbeerjaft.

mit ihr = von ihr; **mit ihn** = mit ihm; — Er hat
sich mit ihr jetrennt = er hat sich von ihr getrennt;
ich bin mit ihn beese = ich bin mit ihm böse.

hallweje = halbwegs ≈ auf halben Wege

(Hallweje Bankow bejeennt id ihn = auf halben
Wege nach Bankow begegnet ich ihm [Bankow
は伯林の區名])

hallweje = ziemlich

(Det sind ja hallweje Dampfers = das sind ja
ziemlich große Dampfer)

imwähren = während

(imwähren det Fahren nich absteijen = während
des Fahrens nicht absteigen)

unter Mittag = im Verlauf der Mittagszeit

über Mittag = die ganze Mittagszeit hindurch.

uf 'n Mittag = um 12 Uhr

an = auf [次の如き文例に於いて]

(Er siht an de Erde = er siht auf der Erde)

um [時間の場合是一般と稍異りたる意味に用ふ]

(um fümten = genau um fünf Uhr; um Uhre
fümten = etwa um fünf Uhr)

in の次の第三格は街學的な用法である。

(Det Berjniejen jehet in dem Felde! ≈ das
Bergnügen kostet das Geld; wie leicht konnte
man det in dem Doge jehen = wie leicht
könnte man das ins Auge gehen)

13. 否定の重複と否定語

否定の重複は通俗理論的に、古代日耳曼語の強調語的に、
單なる反覆語的に、或は又それより生ぜし合成語的に行は
れるものである。

(nie nich! = nicht wahr!; er hat ma keene
Zeit nich jelassen = er hat mir keine Zeit
gelassen; hat keener keenen Schwamm nich? =
hat niemand einen Schwamm?)

niche は nicht の絶對的用法にして、特に小供が好んで
用ひる。

(niche! = laß das!)

nee = nein [極めて一般的な言葉である]

neien = nein [小供の口より時々聞くことがある]

14. so の用法

so = ohne [時々使用さるも、ohne より意味強し]

(Er kommt so = er kommt ohne Begleitung)

15. 語位に就いて

附加語として、名詞の意味を弱め又は強める語は語位を顛倒することがある。

(Ochse verfluchter! 畜生!; Junge verfluchter!
Bengel infamichter! = niederträchtiger berber
Junge; Bengel verfluchter)

強調される動詞は文首に立つが、此の動詞は屢々その不定法に tun を附加して言ひ現はされることがある。

(Glooben du id 't ihn nicht, aber liejen dut er
doch ooch nicht = Glauben tue ich ihm nichts
aber lügen tut er doch auch nicht ≈ ich glaube
das ihm nicht, aber lügt er doch auch nicht;
dun dun wollen se n'icht, aber n'icht dun, det
wolln se dun = sie wollen nichts tun aber nichts
tun, das wollen sie)

意味を強調する爲に同一動詞を重複することあり。

(Kriegen kriecht er n'icht = er kriegt nichts;
haben hab id keenen = ich habe nichts)

16. 不定数語尾 er

數量を表示する單位が、不定的に言表はされる場合、その語尾に er を附す。er は恐らく第二格の形式として生じてきたものであらう。

('n Stücker sechsse = etwa sechs Stück; 'n Fußer
dreie = etwa drei Fuß; 'n Zoller achte = etwa
acht Zoll; 'n Maler zwanzig = etwa zwanzig
Mal; 'n Doller viere = etwa vier Doller; 'n
Wochener sieben = etwa sieben Woche; vor n'

Jahrener zehne = vor etwa zehn Jahre; Uhrer
eenßen = gegen ein Uhr. [Uhrer zehne = Punkt
zehn Uhr]

17. 代名詞を含む動詞形式

副詞が文首にある場合には文中の動詞は代名詞を含めて用ひる。

(Da haste wat = da hast du etwas)

語位の上より觀れば、この現象は今日の獨逸語に於ける一般的語位倒置の例であるが、曾つては動詞の形式によつて、代名詞が不要であつた時代を物語つてゐる。代名詞は其後、非疑問文章に於いても亦力強きアクセントを有する動詞の語幹の次に來るやうになつた。斯くの如くにして吾々は動詞の、二人稱、單數、現在の語尾 t も、略之と同様に諒解することができる。

18. 組立語分離法 (Imefis)

語の組立關係を切斷する用法は、言語の發達に伴ひ一般に減退の傾向にあるが、伯林語に於いては今尙存在し、有名な小説家 Wilhelm Raabe なども盛に使用してゐた。

例へば、副文章に於て anfangen 又は aufhören 等の語が、不定法と共に用ふる場合、不定法は此等動詞の構成要素である前置詞と動詞との間へ挿入するが如きである。

(sowie 't an ze drippeln fing = sowie es zu
trippeln anfing; wie er uf ze reden herte =
wie er zu reden aufhörte)

da と wo はそれと結合する副詞又は前置詞より分離することを得。

(Wo wa'n det drin? = Worin war denn das?;

da licht ma janischt dran=daran liegt mir gar nichts; da meent er mir mit=damit meint er mich nicht; da kommt nischt bei raus=daraus kommt nichts bei; da konnt id nicht for=dafür konnte ich nicht; janz wat Feinet, sehr was Scheenet = etwas ganz feines, etwas sehr schönes [語位の関係はこの種類に属す]; wo anders=anderswo)

hier so 又は **da so** は連結して用ひられ、漠然と大體の場所を指示する。

(Wo tut's denn weh? 答: hier so)

19. 語の交替性

können は **dürfen** の意味に於いて用ふる場合多し。
(Kann id ma rausjehn?=Darf ich mal ausgehen?)

hälfte は **halb** の意味に用ひらる。

(de hälften Leute=die halben Leute; de hälfte Bel-Etage=die hälfte Bell-Etage [半階、伯林にては大抵 Belle-Etage と書かれてゐる]; Regen und Sonnenschirme werden von heute ab zu den hälften Preis [=zu dem halben Preise] verkauft)

de janzgen Leute [=die ganzen Leute]=alle Leute

janz は附加語的形容詞と同一の語尾變化をなすことあり。

('n janzer irober Kerl=ein ganz grober Kerl;

'ne janze verfluchte Jeschichte=eine ganz

verfluchte Geschichte [=Sache])

paa [=paar] 及び **sehr** も亦形容詞に用ひらる。

(die paa Menschen=die paar Menschen; ich habe sonne sehren Koppschmerzen=ich habe solche Kopfschmerzen)

同一語にして發音により意義を異にするものあり。

(Rilljohn [=Religion]—Relijohn [=Gefinnung]; politisch [=politisch]—politsch [=schlau])

am Ende [發音 amende]=wohl gar od. vielleicht

(Am Ende hat er sich verloofen [verlaufen]); am Ende holst'n noch in=vielleicht holst du ihn noch ein)

lang は方向を示す際に用ひらるゝことあり。

(hier lang こゝを; da so lang そこをさう; de Nase lang ≈ geradeaus)

besser は **weiter** の代用をなす。

(Da müssen Sie hier besser runter jehn=da müssen Sie hier weiter heruntergehen; besser links!=weiter links!)

drum は **troßdem** に代ることあり。

(Er hat et drum nich jedan=er hat das troßdem nicht getan)

eene [=eine] は時及び所を規定する場合、nur noch に代る。

(eene acht Dage=nur noch acht Tage; eene

paar Minuten = nur noch paar Minuten; een vier Zoll diefer = nur noch vier Zoll tief)

nur の代りに **man** といふことあり。之を強調して用ひる場合は **bloß** 又は **man bloß** といふ。

sonsten = sonst; **schonst** od. **schonstens** = schon; **lieberst** = lieber; **vorbei** = vorüber; **ebend** = eben (na ebend! ≈ das sage ich doch); **det is et all ebend** = daran liegt es; **so wie so** = in jedem Falle — id komme so wie so.

dreifte は認容の意味を強めるときに用ふ。— wenn du ihn dreifte wat anbietst, der nimmt et nich = wenn du ihm etwas anbietst, der nimmt es nicht.

vill weniger [= viel weniger] = geschweige denn (Kommen Sie in meine Jahre, denn wackeln Sie mit'n Kopp, vill weniger mit de Beene = Kommen Sie denn Sie wackeln mit dem Kopfe, geschweige denn mit den Beinen)

überhaupt = besonders — Die Kinder sind furchba ungezogen; **überhaupt** der Jungste = Die Kinder sind furchtbar [≈ sehr] ungezogen; besonders der Jungste.

denn = dann; **nu** = nun

meistens immer od. **mehrstens immer** = meistens

selber は決して selbst とは云はず。

natierlich [= natürlich] は後文にあるべき場合に於

いても、往々前文に廻はされることあり。—

Wenn er natierlich sonn Torkel hat, is es keen Kunststid = wenn er so einen Torkel [= Glück] hat, ist es natürllich kein Kunststid.

dahinjegen = hingegen

外來語——

外來語は無意識に又は故意に或は又誤つて適用され、従つて誤解されることも尠くない。最近の例を藉れば、kandidieren を kandidatieren と云ひ、Koalition [政黨合同] を Koalifation と云ふが如きである。

20. 冗語 (Pleonasmus) 並に類語反覆 (Tautologie)

(Maintenanu [was meinst du nanu] = nanu; wir zwoe beede = wir beide; der jute bon Ton = der gute Ton [bon (佛語) = gut]; der jardin-Jarten = der Garten [jardin (佛語) = Garten]; ohne sans Facon = ohne Umstände [sans (佛語) = ohne]; mit'n abec = mit Schwung [avec = (佛語) = mit]; stimmt's, oder ha 't recht? = stimmt es? [ha = habe])

21. 無勢語法 (Udynamite) 並に婉曲語法 (Euphemismus)

(Du hast doch noch keen' Bucklijen durch'n Drahtzaun jezogen = du hast doch keinen Buckligen durch den Drahtzaun gezogen.; Du hast doch noch keen' Nacklichten wat aus de Taschen jeklaut = du hast doch noch keinem nadenden Menschen etwas aus der Tasche

gestohlen (du hast doch noch nicht etwas
 Außerordentliches vollbracht); Soll ich mir
 vielleicht noch Pleurenfen wachsen lassen?
 ∞ unmögliches kann man nicht von mir
 verlangen;—Sandarchitekt = Schipper; Bergrat
 = Budliger; Biene = Laus; Barbierflügel od.
 Schifferklavier = Ziehharmonika; Schlafrod-
 fabrik = Sargmagazin.

第八章

文献の數例 (Einige Literaturen)

I. Der Hauslehrer

(Nach Erdmann Graefers Romanzyklus „Lemkes sel. Wwe.“ Bd. III, Abschn. 17, gekürzt von Dr. Hans Meyer.)

Am nächsten Tage — gerade um die Kaffezeit — tauchte in Wilhelm Lemkes Gartenlokal ein junger Mann mit einem schwarzen Bratenrock und goldner Brille auf. Er schien etwas schüchterner Natur zu sein — blieb am Eingang stehen — nahm die Brille ab, hauchte darauf und putzte sie dann mit einem Taschentuch, das er nachher wieder in kleine Quadrate faltete.

„Wat is denn det forn Sticke Unslid?“ sagte Frau Lemke; „der macht ja so'n sparsamen Indrud!“

„Det wird der Nachhilfestundenlehra sind —“ sagte Herr Lemke.

Du hast recht, Willem — er steuert uff't Haus zu, laß 'n man, wollen ma' sehen, ob er uns find't!“

Aber der junge Mann bemerkte da Ehepaar nicht, das am Kaffeetisch hinter dem Fliederstrauch saß — ging ins Haus und kam nicht wieder zum Vorschein.

„Da muß man doch mal jehen und nachsehen,“ sagte Herr Lemke beunruhigt, „er kann sich ja wo injeklemmt haben!“

Gerade, als sich Herr Lemke aber erhob, tauchte Minnas kräftige Gestalt im Türrahmen auf und zeigte

I. 家庭教師

(E. Graefers 小説集「Lemke 未亡人」
第三卷、第十七章、Dr. Meyer の抜萃に據る)

その翌日、——丁度お茶の時刻に——Wilhelm Lemke の庭園レストランに、黒い禮服に金縁の眼鏡をかけた一人の若い男が現はれた。彼は幾らか内氣者らしかつた。入口の所に立寄り、眼鏡を外して、息を吹きかけ、ハンカチでそれを拭いた。そしてその後で、又ハンカチを小さく四角に折り疊んでゐた。

「あの憐れつぽい男は、一體何者だらう。」と Frau Lemke は言つた「何と吝嗇臭い感じがするぢやないか。」

「あれは補習の先生だよ」と Herr Lemke は答へた。

「それに違ひない。ウィリアム——この家の方へやつてくるよ。まあ、放つておこ。わし達を見付けるかどうか、一つ見てゐてやらう」

併し、この男はハトコの樹の影のティーテーブルに腰を掛けてゐる夫妻には氣付かなかつた。——家の中へ這入りこんで了つて、その儘姿を現はさなかつた。

「こりや、どうなつてゐるか見届けてこにやならねえ」 Herr Lemke は不安さうに言つた「何處かへ潜り込んで了つたのかも知れねえ。」

亭主の Lemke が丁度立上つた時、女中の Minna の頑丈な身體が戸口の所に現はれてきた。半分磨きかけのフライパン

mit einer halbgeputzten Bratpfanne auf Frau Lemke: „Na, da sitzt se doch, und der Herr is ooch bei — —“

„Ich danke sehr, mein Fräulein“ sagte der junge Mann, zwängte sich an Minna vorbei und näherte sich entschlossen dem Ehepaar, wobei er den Hut abnahm, grüßte, den Hut aufsetzte und dann wieder abnahm.

„Ju'n Tag — ju'n Tag“ — sagte Frau Lemke wohlwollend.

„Ich habe wohl die Ehre mit Herrn und Frau Restaurateur Lemke? Ich komme mit einer Empfehlung von Herrn Dr. Barth und auf dieses Schreiben hier — das mir gestern zuging. Mein Name ist Anton Fiedler, cand. phil.“

„Ach so —“ sagte Herr Lemke, „na denn sprechen Se man mit meine Fattin, die kennt de Schohse beffa.“ Und man merkte es Herrn Lemke an, daß es ihm sehr lieb war verschwinden zu können.

„Bitte setzen Se sich doch, Herr Kandidat — oda wie sagt man zu Sie, ich kann det nich so kleen aussprechen, wie det hier uff de Visitenkarte steht —“ sagte Frau Lemke und zeigte auf das cand. phil.

„Kandidat der Philologie“ — sagte der Herr.

„Nee, det is mia zu lang — Herr Anton Fiedler“ meinte Frau Lemke kopfschüttelnd — „aba nu wollen wia uns nich so lange bei de Anfangsgrinde uffhalten; Se kommen wejen unsen Edwin?“

で Frau Lemke の方を指し乍ら「あゝお内儀さんはここに居ますよ。旦那も御一緒に——」

「どうも有難う、姐さん」と言ひながら、あの若い男は身體を窮屈さうにして Minna の傍を通り過ぎ、思ひ切つて、夫妻の所へやつてきた。その時彼は帽子を脱ぎ、挨拶をして又帽子を被り、それから改めて又帽子を脱いだ。

「今日は——今日は。」と Frau Lemke は心よく迎へた。

「レストラン店主御夫妻に御面接出来ることを光榮と存じます。私は Barth 學士の推薦とこの書状とによりましてお伺ひ致しました。——この書状は昨日落手したばかりで御座います。私の姓名は Anton Fiedler, cand. phil と申します。」

「あゝさう」と Herr Lemke が答へた「ぢや、あんたはわしの妻と話しておくんない。さういふ要件は妻の方がよく知つとるから。」この亭主は、その場から逃れたがつてゐたことは誰にも察せられた。

「さあ、お掛け、候補者さん——それでおけなけりや、あんたをどう呼んだらいいの。わたしはこの名刺の上を書いてあるやうな、こんな小つぼつけな字は讀めやしないよ」 Frau Lemke は、こう言ひながら cand. phil. の上を指した。

「Kandidat der Philologie」と、その男は云つた。

「おやおや、そりやわたしには長過ぎるよ——Anton Fiedler さん」と Frau Lemke は頭を振りながら言つた。

「まあ、話の緒口なんか、そんなに引つかかつちや居られませんやね。あんたは悴の Edwin のために、きてくれたの。」

„Herr Dr. Barth sagte mir, Sie würden mich damit betrauen, Ihrem Sohn Sprachunterricht zu erteilen —“

„Also — uff Deitsch — Se kommen wejen Edwin. Wenn Se det so vaquaast sagen, wird det nachher een eienziet jroßet Mißverständnis“ — bemerkte Frau Lemke warnend, „wia sind doch unta uns und brauchen keen Blatt vor'n Mund zu nehmen! — Und wat soll det nu kosten? — Se scheinen 'n bißten schichtern zu sind, Herr Anton Fiedler, schenieren Se sich nich! Reden Se dreifte wej von de Lunge und de Leba!“

Herr Fiedler war blutrot geworden, nun entfaltete er sein Taschentuch und fuhr sich über die feuchte Stirn: „Ich würde die Honorarbestimmung der gnädigen Frau überlassen“ — sagte er gepreßt.

„Warten Se ma', id muß mia det erst imma klarmachen“ — sagte Frau Lemke — „man merkt et ja gleich in die ersten fünf Minuten, det Sie Sprachlehra sind. Et hört sich allens wie jedruckt an. Wir haben een'n Verwandten, der unse Tante Marie jeherat't hat — den Herrn Krause — kennen Se woll aba nich?“

„Nein“ — sagte Herr Fiedler.

„Mit den mißten Se sich mal untahalten, der spricht ooch sehr jebildet. Er hat ma mal 'ne Zeitlang allerei beigebracht, aba id hab' et wieda wajessen. Da muß man in de Jbung bleiben, sonst is det nischt!“

Herr Fiedler machte eine zustimmende Verbeugung.

「Barth 學士が申されますには、„私を御子息様の語學指導の任に當らして下さるさうで御座りますが。“」

「では——獨逸語を——Edwin のためにきてくれたんだね。あんたは、それをそんなに混入つて話しちや、後になつて、本當に大きな誤解が出来るもんだよ」と Frau Lemke は警告するやうに言つた。「わたし達は、もう内内だ。あけすけに話すもんだよ——所でそれは幾許かゝるの。あんたは少し内氣のやうに見えるね。遠慮なんかするもんぢやない。大膽に打明けて話して御覽。」

Herr Fiedler は眞赧になつた。彼はハンカチを開いて汗ばんだ額を拭つた。「報酬額は奥様に御一任申上げませう」と彼は苦しさに云つた。

「一寸待つておくんない。わたしは前以てそれをはつきりしとかなくちやならない。」と Frau Lemke は言つた「あんたは、五分も経たない中に、語學の先生であることが、直に分るよ。あんたの話はまるで切口上のやうに聞えるね。わたし達にも、伯母の Marie と結婚した親類があるが、その人の名は Krause さんと云つてゐる。——併し多分知らないだらうね。」

「存じ上げません」と Herr Fiedler は言つた。

「あんたはその人と一度話さなくちやいけない。仲々話なんか垢抜けしたものだよ。わたしは暫らく色々なことを教へて貰つたもんだけど、又元通り忘れて了つたのよ。いつも練習しなくちや何にもなりやしないやね。」

Herr Fiedler は、それに同意して頷いた。

„Un denn hatten wia mal eenen Klavierlehra, der sprach woll noch feiner wie Sie. Der hatte ganz merkwirdige Ausdrücke. Wenn der Kirschkompott sagen wollte, denn sagte er immer Kirschkompoh, und statt's Beene sagte er immer Bedale — überhaupt, det war ein ganz sonderbarer Mensch — Hahn hieß er — haben ihn woll auch nicht gekannt?“

„Nein“ — sagte Herr Fiedler.

„Se haben woll überhaupt wenig Umgang mit Menschen gehabt. — Ich meine bloß —“ Mit einem mütterlich-wohlwollenden Blick die schwächliche Gestalt des jungen Mannes umfassend, setzte sie dann hinzu: „Der Herr Hahn hatte immer mächtigen Hunga — darf ich Sie vielleicht auch 'ne scheene Schinkenstulle vorsehen — können auch Schweinebraten kriegen!“

„Ich danke sehr“ — sagte Herr Fiedler.

„Na, denn trinken Sie wenigstens 'ne Tasse Kaffee — Hunga werden Sie nachher schon kriegen.“

„Wenn Sie gestatten, sehr gern. Ich hätte nur vorher gern gewußt, welches die Bedingungen sind, unter denen ich mit dem Unterricht betraut würde. Ich erlaube mir, darauf aufmerksam zu machen, daß das Stundengeben meine Einnahmequelle ausmacht……“

Frau Lemke legte ihm die Hand auf die Schulter: „Vor umsonst sollen Sie 't auch nicht machen, Herr Fiedler, und die Schinkenstulle und die Tasse Kaffee

「それからピアノの先生を頼んだこともありますが、その人はあなたよりもつと上品に話したもんだよ。そして本當に珍しい言葉を使つてゐました。まあね、Kirschkompott と云はうとするとき、Kirschkompoh と云ふし、Beene [=Beine] の代りにいつも Bedale と云つたやうな具合さ。兎に角あの人は全く變つた人間だつたよ。Hahn といふ名だつたが、この人もあなたは知らないだらうね。」

「存じ上げません」と Herr Fiedler は言つた。

「あなたは餘り人と附合ひをしなかつたやうだね。それは只わたし丈の考へだが」母のやうな愛情にみちた眼付きで、その若い男の痩せこけた身體を抱へるばかりにして、更に言葉を續けた。「その Hahn さんは、いつも大變お腹が空いてゐたもんだ——わたしはあなたにも亦旨いハムのサンドウイツチを上げることにしようね——炙いた豚肉も食べられるよ。」

「どうも有難う存じます。」と Herr Fiedler は答へた。

「さあ、では、この一杯のコーヒ位はお飲み——後で屹度お腹が空くだらうから。」

「お赦しとあらば、有難く頂戴致します。唯私は前以て如何なる條件の下に授業を御委任下さるか、その條件に就いてお伺ひしたいので御座りましたが。失禮とは存じますが、個人教授は私の収入の源泉を意味するものであることをお含み置き願ひたう存じます……」

Frau Lemke は彼の肩に手を戴せ「ロハで教へることは出来やしないやね。Fiedler さん。そしてハムのサンドウイツチ

sollen keene Bezahlung nich sind. Stellen Se man Ihre Bedingungen, fordern Se jetrost, wat Se zu fordern haben, und denn sein Se vasichert, denn lej' id noch wat druff!"

„Gnädige Frau sind sehr gütig.....“

„Und denn sagen Se nich mehr inädje Frau — det paßt nich recht — for jütig können Se mia halten, det bin id, da will id nicht jejen sagen.....“

Herr Anton Fiedler verbeugte sich und sah Frau Lemke dankbar an.

„Se werden sich bei uns schon wohlfiehlen, passen Se mal uff, in'n halbet Jahr können Se den Rock vorne nich mehr zuknöppen, so velle Fett haben Se angesetzt!“

„Das wäre nicht gut“ — versuchte Herr Fiedler einen etwas freieren und scherzhaften Ton anzuschlagen — „da müßte ich mir einen neuen machen lassen.....“

„Und det würde nich schaden. Der Kragen is schon 'n bißken speckig — hinten — wo die Haare druffstoßen“ — sagte Frau Lemke.

Der junge Mann wurde sofort wieder bedrückt und sah unruhig umher.

„Könnte ich jetzt vielleicht die Bekanntschaft meines Schülers machen?“

„Det können Se! — Edwin — Ged — wien!“

も、一杯のコーヒもお代は要らないよ。條件を切出して御覽。あんたが必要な丈、構はず云つてみなさい。さうしたらあんたは安心出来るわけだわね。それからその上何か外にあげることにしてよ。」

「奥様は大變御親切でゐらつしやいます……」

「それから奥様なんかつて云はないでおくれ——それはわたしにはうつりやしないよ。——わたしを親切だとは思つてくれてもいい、實際わたしはさうなんだ。わたしは何でも人に逆つて言へない性分だからね。」

Herr Fiedler は頭を下げて、Frau Lemke を感謝しながら見つめた。

「あんたはこゝを気に入つただらうね。氣を付けてゐて御覽、半年の中には、もう前のボタンがかゝらなくなるよ。そんなに肥つちまうよ。」

「それは困りますね。」—— Herr Fiedler は幾らか自由な諧謔的な調子に直さうと努めた。「その時には新調せねばなりませんね。」

「構やしないやね。」—— カラーも少しは脂ぎつてゐる——後が——髪の突張つてゐる處が。」と Frau Lemke は言つた。

若い男は又直ぐに苦しさうになつて、不安らしくあたりを見廻はした。

「只今、私の生徒に會はして頂くことが出来ないでせうか。」

「出来るとも。—— Edwin — Ged — wien!」

II. Det liebe olle Haus

(Von Paul Kunzendorf)

Ich steh' vor'n ollet, jraunet Haus
 Und kann mir janich satt dran kiefen.
 Et sieht so schlicht und eenfach aus
 Und hat niicht an sich for Kritiken.

Doch mir jefällt's. Aus oller Zeit
 Jeht von ihm aus wie eene Sage
 So'n Schein von Glid und Freelichkeit,
 Ganz anders wie wo heitzutage.

Ich spiere wat in mein Jemieth,
 Det kommt mir vor wie erste Liebe,
 Doch gleich wat andret mir durchzieht,
 Det fiehlt sich an wie'n bißken Siebe.

Zum Hof raus jehet, wie einst, noch heit
 Det Fenster von't Berliner Zimmer —
 Du scheener Traum der Jugendzeit,
 Du bist verduftet längst for immer.

In diejet Zimmer stand mein Bett,
 Vielleicht war't ooch man bloß ne Wieje —

II. Das liebe alte Haus (獨譯)

Ich stehe vor einem alten, grauen Haus
 Und kann mich gar nicht satt daran gucken.
 Es sieht so schlicht und einfach aus
 Und hat nichts an sich für Kritik.

(für Kritik = darüber zu reden)

Doch mir gefällt es. Aus alter Zeit
 Geh't's von ihm aus wie eine Sage
 So ein Schein von Glid und Fröhlichkeit,
 Ganz anders als wie heutzutage.

Ich spüre etwas in meinem Gemüte,
 Das kommt mir vor wie erste Liebe,
 Doch gleich was anders mich durchzieht,
 Das fühlt sich an wie ein bißchen Siebe.

Zum Hof hinaus geht, einst wie heute
 Das Fenster vom Berliner Zimmer —
 Du schöner Traum der Jugendzeit,
 Du bist verduftet [=verflogen] längst für immer.

In diesem Zimmer stand mein Bett,
 Vielleicht war's auch nur eine Wiege —

Ganz gleich wenn ich man stets so nett
Wie damals uff mein Kissen lieje!

Von hier hab' ich den ersten Schritt
Getan in't stürmereiche Leben,
Von hier nahm ich so velle mit
An juten Rat, der mir jegeben.

Und steh' ich heite vor det Haus,
Zieh ich den Hut zu seinen Preise.
Mir is, als wenn zum Fenster raus
Gewunken wird in lieber Weise.

Ob Jugend voch und Glüd verbliehn,
Erinnerng bleibt uns bis zum Reste —
Du, mein Geburtshaus in Berlin,
Du bist die liebste mir und beste!

Ganz gleich wenn ich nur stets so nett
Wie damals auf meinem Kissen liege!

Von hier habe ich den ersten Schritt
Getan in das stürmereiche Leben,
Von hier nahm ich so vieles mit
An gutem Rat, der mir gegeben.

Und stehe ich heute vor dem Hause
Ziehe ich den Hut zu seinem Preise.
Mir ist, als wenn zum Fenster heraus
Gewinkt wird in lieber Weise.

Ob Jugend auch und Glüd verblühen,
Erinnerung bleibt uns bis zum Reste —
Du, mein Geburtshaus in Berlin,
Du bist das liebste mir und beste!

III. Die Rümmelespekulation

(Von Adolf Glasbrenner)

Zwei Arbeitsleute saßen zusammen auf der Treppe eines Eckhauses und sprachen von diesem und jenem.

„Hör mal, du,“ sagte der eine, „ich habe mir det schonst lange überlegt, wir müssen mal uf 'ne leichte Weise een paar Groschen verdienen; det Dragen jreift zu sehr an, un man hat weiter keen Berjniejen davon. Weekte wat, wir wollen mal mit Schnaps spekulieren. Über acht Dage is det Wottensfest in Lichtenberg; bis dahin sparen wir uns achzehn Groschen und loosen for 'n Daler een kleen Tönneken mit Rümmeles. Die sechs Groschen Rabatt, die sind schonst unser, un denn siehste natierlich, mit det eenzelne Flöser Inschenken verdient man ooch noch 'ne Menge Geld.“

Der andere ging in diesen Vorschlag ein, und als der festliche Tag erschienen war, zogen beide frühmorgens zum Tore hinaus, Rümmeles beladen gen Lichtenberg. Kaum waren sie aber eine Viertelstunde gegangen, so hielt derjenige, welcher das Fäßchen trug, an und sagte:

„Hör mal, Spertel, det is heute ochsig (sehr) neblig; wir wollen jeder eenen jeniejen, sonst erkälten wir uns.“

Dies geschah und wiederholte sich mehrere Male.

Spertel: Du, Lehmann, seh mal in det Faß rin,

komm mal her! Seh mal, wat da schon for 'ne Öffnung in den Rümmeles entstanden is.

Lehmann (schaut hinein): Hol mir der Deibel, richtig! Wie det allens in de Welt abnimmt, det is merkwürdig! Den ganzen Rabatt haben wir nu schon vernossen; na jek bleibt uns bloß noch de Ware an un für sich. Na, aber det schadt nischt, ich tröste mir, et war heute neblig, un bei solch Wetter muß man sich sehr in acht nehmen. Mir is schonst wieder so kalt in 'n Magen, schenk mir mal eenen in, aber schwaddern muß er.

Spertel: Nee, Lehmann, det jekt nich mehr! Von de Ware dürfen wir nischt anjreifen, dabei jingen wir zujrund. Mir durstert ooch, aber ich wer dir erklären, wie wir die Sache machen. Verkooft muß der Borrat werden; dazu is er da. Ob wir nu davon jeniejen oder een anderer. Jeder is sich selber der nächste. (Er greift in die Seitentasche der Jacke.) Seh mal, ich schenke mir jek eenen in, un jebe dir daför een' Groschen, damit die Jeschichte ihren ortlichen Gang jekt. (Er gibt Lehmann einen Silbergroschen und trinkt.)

Lehmann: Spertel, ich kann 't nich mehr aushalten, halte mal an! Schenk mir mal for 'n Groschen in! (Er trinkt und bezahlt.)

Spertel: Die Gelegenheit wer' 'd benutzen, mir is

de Kehlle ooch schonst wieder so trocken. (Er trinkt und bezahlt. Sie gehen weiter.)

Lehmann: Du, setz mal die Tonne ab un jieß eenen in! Ich muß eenen feisen, mir is so musikalisch zumute. (Er trinkt und bezahlt.)

Sperkel: Et muß durchaus heute an de Witterung liegen! (Er schenkt ein.) So 'n Durst, wie id heute habe, is mir ooch noch nich vorjekommen, obschon mir schon velle Durste vorjekommen sind. (Er trinkt und bezahlt.)

Lehmann (sehr ernst): Ich will dir sagen, Sperkel, det liejt nu woll ooch mehr an de Felejenheit. Wir haben den Kümmeel sonst nich so bei de Hand wie heute. — — —

Als sie nach Lichtenberg kamen, war der Handelsartikel bis auf eine Reige verschwunden.

Sie zählten darauf ihre Barschaft, sahen sich gegenseitig mit großen Augen an und konnten vor Verwunderung nicht zu Worte kommen.

Ihr Vermögen bestand nämlich in einem Silbergrofchen, mit welchem sie sich wechselseitig bezahlt hatten.

(本稿は練習課題の爲、譯文を附せずに残しておいた。本書を通讀すれば、譯讀に支障を來すことは恐らく無かろうと思ふ。それ故こゝには唯特に難解と覺ゆる語のみ譯解しておいた。)

Kümmeelspekulation: ブランディーの思惑、酒の思惑

Groschen = Groschen: 十片の銅貨

Mottenfest: ランヤ地やセル地の小賣市

Lichtenberg: 伯林の區名

Inschenken = Einschenken: 酒をコップに注ぐこと

vernossen: verbraucht

schwaddern: ohne Sinn reden

feisen: trinken

Berlin um Mitternacht.

(Dr. B. Secklein.)

Vor dem Tanzlokal Orpheum.

Schutzmann: Bezahlen Sie sogleich ihre Beche!

Kellner: Wie kann man hier Schulden machen?

Brömmel: Det haben Sie ja eben jesehn — man bestellt un bezahlt — nich!

Kellner: Dann müssen Sie ein Pfand hier lassen.

Brömmel: Et is jut; — id werde meine Schulden als Pfand hier lassen. Erlauben Sie, daß ich eine kleine Rede halte —

Schutzmann: Sie haben hier nichts zu halten als das Maul!

Brömmel: Aber Herr Schutzmann, mein Maul is ja bloß dasselbe, wat Sie sind — nämlich un gehalten!

第九章

若干の主要語に關する語句 (Ausdrücke für einige Hauptbegriffe)

1. 挨拶、別辭:

Su'n Dag ooch! Morjen, die Herrn! Wie jeht's? So so la la. So lila. Immer uf zwee Beene. So sachteken. Na so hallweje. — Mahlzeit. Früh Muttern. Frühen Se Ihre Waschfrau. Leben Sie so wohl als auch. Schlafen Se wohlriechend. Schlaf rund, dette nich edig wirft.

2. 肯定、同意:

Allemaal! Dachten Sie anders? Dide! Feste! Immerzu! Na jewiz doch! Na klar! Na ob! Na überhaupt! Aber richtig. So wa't richtig! Vielleicht nee?

3. 欺瞞:

abluchsen, behumpfen, schummeln, beschuppen, betimpeln, hochnehmen, lachieren, meiern, mogeln, zudecken.

4. 恐喝:

Willst woll 'ne fleene Abreibung haben? Sie ha'm wol lange keene Backzähne jespuckt? Dir

wer 't 's beibringen. Se könn' de scheensten Reile befehn. Krist 'n Ding. Wat? Sie wollen mir dreedig kommen? Sie nich, verstehn Se, mir nich! Hast wol lange keenen blut'jen Einsatz jehatt? Den Kerl wer 't de Eisbeene kniden. Wat willst 'n erben? Dir hau id in Fegen! Du frei dir man! Id wer dir zeijen, wat 'ne Harke is. Id hau dir zu Mus. Wo willst 'n liejen? Hast wol lange keen Berliner Rot jesehn? Wünschen Se velleicht noch wat? Weeßte, verstehste!

5. 愚鈍:

Beeschaf, Blasenlopp, Bombenlopp, Bouillonlopp, Demelack, demlich, desig, doof, Drege, Duzel, Potsdamer, Roß, Stiesel, Schlummerlopp, Bist wol nich von hier? Bist wol von jestern?

6. 食事:

futtern, präpeln, preepeln, spachteln, verpußen, verispulen, Fettlebe machen.

7. 歩行:

abhauen, asten, baden, boddern, eisen, entern, fejen, fliejen, fligen, hopsen, klettern, krebsen, losjehn, losziehen, loszoddeln, schieben, schlenkern, stapeln, stiebeln, Er kommt anjedanzt (anjeflißt, anjegondelt, anjeländert, anjewackelt, anjewalzt).

8. 金錢:

Asche, Draht, Eier, Kies, Knöpfe, Koks,
Kreuzen, Marie, Möpse, Moneten, Monnee,
Moos, Penunge, Piepen, Pinke, Pulver.

9. 無關心、類似:

Det is drin wie draußen. Det is draußen wie
vor de Diere. Borne so hoch wie hinten.
eenjal. Jacke wie Hose. Dieselbe Kulör in
Frün. Mus wie Miene. piepe. pomade. schurz.
Allens eene Wichse, eene Soofe. wurschtig.

10. 服裝:

衣服: Kleedage, Kluft, Schale.

帽子: Malkasten, Bibi, Zivihelm, Deckel,
Dohle, Cilinder, Wichstopp, Ballon-
mütze, Kiepe, Riffe, Kreissäge.

フロックコート: Bratenstipper, Dreckstipper.

燕尾服: Schniepel, Schwalbenschwanz.

婦人服: Fahne, Fummel, Schabracke, Som-
merwohnung, Soofenstipper.

靴: Drecktreter, Rinderfärje, Laatschen,
Pariser.

其他: Fipsverband (白チョッキ), Flanzpelle
(薄い夏ジャケツ)

11. 身體の部分:

頭: Birne, Demel, Rübe, Schandudel.

顔: Fassade, Frage, Sakal, Bisage.

眼: Flohen, Kulpfen, Kulleroogen, Lufen.

鼻: Banane, Bolle, Erker, Furke, Knoppnese,
Kümmelnese, Nuge, Nulpe, Nuß, Roßnese,
Rüssel, Tulpe, Zinken.

口: Fresse, Klappe, Rand, Sabberschnauze.

畸形の口: Flunsch, Karpenschnute, Limpe,
Puffschnute, Flalbbe.

顎: Kader, Rinne.

喉: Papc, Schlung, Schnörjel.

腹: Kartoffelbauch, Pansch, Plauze.

手: Mauerkellen, Patsche, Pote, Vorderflosse.

足: Fächer-, Dachs-, Eis-, Mops-, Paddel-,
Semmel-, Tackelbeene, D-Beene, K-Beene.

12. 打擲:

Backseife, Bremse, Mauschelle, Moppe, Schote,
Einem cine andren, anpassen, lesen, fleben,
löschen, runterhauen, runterlangen, stechen, ver-
wischen. —

Bimse, Dresche, Haber, Haue, Holze, Kalasche,
Risse, Schacht, Schmiere, Senge, Simse, Wachs,
Stauke, Wucht.

dreschen, hauen, einweihen, fauzen, schachten,
stufen, wischen, ufbremsen, ufbrennen, überziehen,
verkeilen, verkacheln, verdreschen, verschalen,
versohlen, verwalken.

13. 狡猾:

'n Mas, anschleef'ich, dreihärig, helle, jerieben, jerissen, 'n jesunder Junge, jewiejt, 'ne Krete, politisch, Schlaumeier.

14. schlecht, schwach に代る語:

belemmert, nich berühmt, dinne, klattrig, kletzig, lumpig, mau, mierig, mies, nuttig, plundrig, poplig, schauderös.

15. sehr に代る語:

aasig, bannig, barbarisch, blödsinnig, diebisch, eflig, furchbar, haarig, haarsträubend, hellisch, jehörig, klobig, kloßig, kolossiv, laufig, mächtig, mörderlich, rasend, riesig, scheußlich, schmehlich, schrecklich, unverschemt, verdammt, verbeibelt, verflucht.

16. 竊盜:

atern, ausführen, ausspannen, sich zu Semiete ziehn, kiefen, klauen, klemmen, langem, mausen, mopsen, schalen, stippen, stremmen, et liejen zu lassen.

17. 死亡:

abnibbeln, abschrammen, druffjehn, hopsjehn, krepieren, Krufe machen.

18. 飲酒:

biejeln, kiefeln, picheln, pietschen, abbeißen,

sich bezechmen, feisen, heben, in de Sacke schwenken, sich zu Semiete führen, jenehmijen, kippen, kimmeln, sich leisten, lutschen, blasen, zwitschern.

19. 醜陋:

anjedudelt, anjehertert, anjeniichtert, anjerissen, anjeroocht, anjesäuselt, beduselt, besizelt, beschickert, beschmettert, beschmort.

20. 愚行 (馬鹿馬鹿しきこと):

Blaf, Blech, Blödsinn, Dinger, Feez, Fuz, Raff, Kaleka, Rebs, RoL, Ruddled, Venz, Quatsch, Salat, Stuß, Zimt.

21. 否定、拒絕:

Ausjeschlossen, Appelluchen! Beileibe nich. Wenn Se mal wieder wat brauchen. Uf keen' Bums. Danke for Backobst. Davon steht nicht drin. 'n Deibel ooch. Janich dran zu denken. Du denkst wol ooch? Dieses wenijer. So dumm sind wa nich. Uf eenmal! Denkt ja keen Ferd dran. Fällt mir janich in. Hat sich wat. I wo. I wo wer 't denn? Keene Idee. Is nich. Raum. Nich vor Reje, Keene blasse Ahnung. Kein Bein. Nich sehn. Keene Spur.

23. 浪費:

aasen, verbimsen, verbuttern, verdrücken, verjuden, verknaden, verliedern, verludern, ver-

möbeln, verposamentieren, verpulvern, verputzen, verquaden, verquaddern, verschludern.

23. 驚愕:

Nu bitt ic eenen. Weef der Deibel. Nu denken Se sich bloß an. Krist 'n Dod. Doll jenuch. Donnerhagel, Donnerkiel, Donnerwettsteen! Ei wei Bade. Hat eener schon so wat erlebt. Nu frag ic eenen. Det war doch früher nich. Alle Hagel. Det erste, wat ic höre. I wat. I seh mal an. I wat Se sagen. Nu schlaß Gott 'n Deibel dot. Ich bitte zu jrüßen. Gott steh mir bei. I du meine Süte. Junge, Junge, Jung! Kiel mal an. Ich denke, ma plakt der Kragen. Mann Gottes! Menschenkind! Is 't de Möglichkeit. Krist de Motten. Nee doch. Wat sagt der Mensch dazu. Schwere Angst. Na ic sage voch. Nu seh eener an. Namu hört's uf. Hastte Worte?

24. 疑惑:

Ach nee! Jeh't's noch weiter? Mach ma noch 'n Wig! Meen Se wirklich? Mensch, det jloob man alleene! Na na! Namu mach'n Punkt. So siehste aus! Wat Se sagen! Wer't jloobt, wird selig.

第十章

常用語と慣用成句集
(Die Sammlung der vielgebräuchlichen
Wörter und Redensarten)

A

As, n. 1) 一般には軽く Mensch の代りに用ふ。但し多少 Vorwurf の意を含む: Nu seh mal det ~. So 'n reichet ~. „~,“ du hast mir nie jeliobt. 2) 侮辱的言辭: 'n ollet [=altes] ~. 3) ~ uf ~ は begierig auf 又は kundig in: ~ uf ~ Kartoffeln!. 'n uf de Zeije [=Geige]. 4) Schlaupopj: Det is 'n ~.

Abitur, Abitur, ギムナジウムの卒業試験(Abiturientenexamen).

abjejn, 1) los gehen, sich ablösen: Der Kopp ist abjejangen. 2) Er läßt sich nisch't ~. d. i. er lebt gut. 3) Jeh't da nisch't von ab? 値段は引けませんか。

adsee, adieu. 別れの挨拶としては殆んど用ひられず。

Ahnung, Urteil, Gedanke, Idee: keene ~ d. i. kein Gedanke.

alle, zu Ende: Det Öl is ~. Alle ~ もう少しも無い。

alleene, allein, selber: ~ jraul [=grau] ic mir. Det weef ic ~ nich.

anders, übel: Mir wird janz ~.

anjejn, 1) anfangen: Wenn ehr jelt'n de Schule wieder an? 2) verderben: Det Fleisch is anjejangen. 3) Es jelt an. d. i. ziemlich.

anständig, 可なりの意に用ふ: Ich war janz ~ besoffen. Jeh

rejent [= regnet] et ~.

Arbeet, Arbeit.

Art, Ach uf die ~? d. i. ach so meinen Sie? Er setzt sich hin, det's ne ~ hat. 彼は悠然と坐る。

ausjerechnet! ~! は das soll man glauben? と同義。Er ist ~. d. i. ausgedacht.

ausgeschloffen! 駄目だ、飛んでもない。

B

Been, Bein ~ は Fuß (伯林人は Fuß なる語を多く用ひず) の代りに用ふ: Er tritt mir uf de ~e (彼は私の足を踏む)。

Wie jehl's? Immer uf zwee ~e.

befehn, 1) bekommen: Du wist jleich wat ~! d. i. Schläge bekommen. 2) ausstehen: Ich kann den Perl nich ~.

befoffen, betrunken.

bifßen, bißchen.

bitte, ~ Danke, recht viel! (食事中差出された食物を断るとき) ~, recht freundlich! (寫眞撮影者の常套語、今は一般に普及さる)。

Blasenfopp, 1) Dummkopf. 2) aufgeblasener Mensch.

blau, 1) betrunken. 2) dumm. 3) ~er Montag 職人の休みの月曜日. 4) Der redt det Blaue von' Himmel runter あの男は大嘘つきだ。

bliehen, blühen.

Boom, Baum.

Buchholz, Denn kenn'n Se ~en schlecht 君は僕の (或は彼の) 人物をよく知らない (~はフリードリッヒ大王の Schachmeister であつて、大王が人の要求を拒絶する際に用ひしこの言葉を援用したものである—denn = dann)

bubbeln, graben.

Bude, 1) Laden. 2) Wohnung. 3) Werkstatt.

bummeln, schlendern, müßig gehen.

Bums, 1) 低級な居酒屋 2) 突然起つた音響。

C

Cheefelong, die Chaiselongue.

Chor, Corps の代りに用ひらる: Se is bei's ~ d. i. sie ist eine Tänzerin.

Clique, Gesellschaft.

D

Dag (spr. Dach). Tag: Dag (ooch)! d. i. Guten Tag!; Dte mach id noch alle ~e (そんなことは何時でも出来る)。

Daler, Taler: Mich for 'n ~. d. i. unter keinen Umständen.

Damm, Uf'n ~ d. i. gesund.

Dante, komma! 侮辱に對する皮肉的な應酬。

davor, dafür. Ich kann nich ~. d. i. bist wohl verrückt?

Deibel, Teufel. 'n ~ ooch! d. i. durchaus nicht!; Beeß der ~! そんなこと分るものか; Det is een ~! d. i. ganz dasselbe. Da sibt der ~ hinter! d. i. das ist schwierig.

denn, dann.

dicke, dick. Det hab' id dicke! d. i. satt.; So ~ sind wir noch nich. 吾々は未だそんなに親しい間柄ではない; So hab' id 't ooch nich zu siben, d. i. so reich bin ich nicht; Dicke! 尤もだ。Dieder! は學生が互に呼ぶ Liebeswort である。

Ding, Krist 'n ~! d. i. eine Ohrfeige; Wat for 'n ~? 何を云つてゐるのかね; Sie, machen Se keen ~e. d. i. keinen Unfinn.

binne, dünn.

direkt, 副詞としては geradezu, wirklich の意味に用ふ: Et is ~ schade, ~ unmöglich u. ä.

Dob, Tod. allen ~ und Deibel. d.i. alles Mögliche. Du kannst dir 'n ~ holen. d.i. dir eine tödliche Krankheit zuziehen. Ich bin dobsterbenkrank (少し気分が悪い)。

doll, toll.

Donnerhagel! Dunderkiesel! Donnerkiel!

Donnerlittlen! Donnerfatan! Donnerwackstoc!

Donnerwittstoc! Dannerwittsteen! 何れも驚愕を表はし、Donnerwetter と同意義である。

Dreck, Schmutz. (Drecker. schlechte Sachen): Nu stehste da wie't Kind bei'n ~. d.i. nun weißt du nicht, was du anfangen sollst.

brocken, trocken. 1) Da bleibt keen Dage ~ 泣く程笑はないものはない (Wiß など聞いて). 2) teilnahmslos: Er erzählt einem Wiß in ~ er Weise. 3) abgemagert.

drum, ooch! d.i. das erklärt die Sache.

dumm, Na so ~! そんなに馬鹿であるものか; Det is ~. d.i. unangenehm; Laß dir nich ~ machen. d.i. laß dich nicht beschwägen.

dun, tun. Na du [= tun] man [= nur] nich so. d.i. verstelle dich nicht!

E

ebend, (spr. ehmt) eben. Na ~! 全く僕の考へ通りだ; Na ~ drum. d.i. das ist gerade der Grund.

Ecke, 1) Etüick 距離を示す: Von hier bis an't Schloß is 'ne jeherige [= gehörige] ~. 2) eenen um de ~ bringen. d.i.

ihn ermorden. Papiere um de ~ bringen. d.i. sie beseitigen. **eejal**, gleich.

Ei, wei, 喜悅、驚愕、心痛、決心等を表はす感嘆詞。

Eisenbahn, 1) Zug の代りによく用ひらる: Wenn kommt 'n de ~? 2) Bahnhof の代りにも用ふることもあり: Uf der Förliger ~ is Feuer.

ejal, egal.

Elle, Der hat 'ne ~ verschluckt. d.i. er geht sehr steif und gerade; Denn wird de ~ länger wie der Fram. d.i. die Kosten ist größer, als die Sache wert ist.

Ende, Etüick. 'n ~ Wurscht.

erben, gewinnen.

ete., etepetete の略語. zimperlich, prüde.

F

Fall, Det is nich mein ~! d.i. da halte ich nicht mit.

Falle, Die ~! d.i. das glaube ich nicht.

falsch, 1) unrecht. 2) auf falschem Wege: id bin hier wol ~? 3) böse: id bin so ~ uf den Kerl!

famos, schön: Nu ~!

Fassade, f. Gesicht: Sich de ~ abklatschen lassen. d.i. sich photographieren lassen.

faul, schlecht, unzuverlässig. So'n ~er Junge!

Feez, Spaß, Unsinn: Nu ~! d.i. das wird ein Spaß.

Feier, Feuer.

Feinstoft, 食糧品. 1914—1920 の間の Fremdwortbekämpfung の結果、Delikatessen と同意義に用ひらるゝに至つた。

ferchterlich, fürchterlich.

Ferd, Pferd. Det merkt 'n ~. d.i. das ist leicht zu merken.

Er is uf sein ~. d. i. er ist in seinem Fach, in gehobener Stimmung!

efte, fest. 1) sehr, ordentlich. 2) Halt dir ~. d. i. sieh dich vor! (驚駭の場合). 3) 喧嘩のときの 呼声: ~ Karl! 4) Feste! 確かに。

Fett, 1) Lohn: da haste deinen ~. 2) Fettfleck=dicker Mensch.

finden, Wie ich das finde! d. i. das ist nicht hübsch von dir; For det Felt is et gefunden. d. i. sehr wohlfeil; Det Felt is doch jefunden. d. i. leicht verdient.

Flanze, Pflanze.

Flaume, Pflaume. Die ersten ~ sind madig. d. i. wer zuletzt lacht, lacht am besten.

Fleck, 1) Stelle. 2) Machen Se sich man keen' ~. 氣取つたりするな。

Fleesch, Fleisch.

fliejen, 1) eilen: id flieje ja schon. 2) zittern: id flieje vor Angst. 3) entlassen werden.

flöten jehn, verloren gehen.

Flunder, 粗悪な食事の譬に用ふ: Man konnte nischt weiter essen, wie ~.

for, für.

Forkenbecken, Kaiser Wilhelm II が登極の際柏林市民の献上せし Schlossbrunnen を云ふ。時の市長の名 ~ に由来す。

forfch, stark. (Forsche=Stärke).

fragen, 驚嘆を現はす: Du frag id eenen!

Frage, Gesicht.

freien, freuen.

Fresse, Mund, Maul: ~, Franz! d. i. halt's Maul!

frifch, 1) gut genug: Det is lange ~! 2) neu, rein: 'n ~ er

Seibel, 'n ~ er Hemd.

fui, pfui! ~ Spinne!

Fund, Pfund.

furchbar, [spr. furschbar] 上流家庭の女性の間愛好さる言葉であつたが、今は一般的に廣く使用さる。Er ist ~ nett. d. i. er ist sehr gütig; es is ~ heeß. d. i. es ist sehr heiß.

futsch, weg. Det Felt is ~. d. i. das Geld ist weg.

futtern, 1) selber essen. 2) füttern.

6

S を見よ。

5

haarig, 副詞にては sehr と同義: Wir war'n alle ~ besoffen.

haben, Hat sich was! そんな馬鹿なことがあるものか。Sott hab da man nich! 何だのおめかしなんかするなよ。

hacken, kleben, festfugen: Die Briefmark: will nich ~; bleib nich ~ man nich ~!

hallweje, halbwegs, ziemlich. Na so ~. まあどうにかやつてゐる; Machen Se't man ~! d. i. übertreiben Sie nicht!

hals, Er hat se an' ~e. d. i. er ist mit ihr verlobt.

hängen, 1) hacken の如き意味を有つ: Hier hängt er d. i. hier ist er. 2) unordentlich: Siehst aus wie jehangen.

Hanne, 1) Hans の呼稱. 2) Schwächling. この意味に於ては又 Hanneken といふ: Er ist so'n Hanneken. d. i. eine Mensch ohne Kraft und Energie.

Hanschuh, Handschuh. 又之を Hanschen ともいふ。

Happen, Bissen.

Hafeten, Hofewort として用ひらる: Mein ~!

Hafenbrot, 古パンを子供達に旨く食はさうとする場合、獨逸の傳説上の語を藉りて ~ と云ふ。

hauen, schlagen に代つて常用さるゝ語。

Häupter, Anführer, Leiter.

Hecht, 1) Mensch: 'n netter ~. 2) Tabaksqualm im Zimmer.

heeszen, 父母が小供の方言を矯正せんとするとき、~ heißt et nich. などと云ふ。

Heft, Mensch を皮肉つて用ひし語: 'n nettet ~!

heidi, schnell weg.

heimlich, durchtrieben, schlau.

helfen, Warte, dir wer 't ~! (恐喝の場合)。

helle, klug, hell. **hellicht**=hell: am hellichten Tage.

Hering, 1) 瘦せた者の譬に用ふ: Mager wie n' ausgenommen er ~. 2) 諧謔的には愛好する食物を意味す。

Herr, 挨拶の一形式: Morjen die ~n!

Hieb, 1) Schluck. 2) kleiner Rausch. 3) Er kann 'n ~ verdragen. = viel trinken.

Hise, Hast wol ~? d. i. bist wohl verrückt?; 働きたくない場合の口實: bei die ~!

Honig, Er schmiert 'n ~ uf de Backe. d. i. er schmeichelt ihm.

Hoppentwahr! Gott bewahre!

Hund, Untern ~en! d. i. unter der Kritik; der wird bald uf'n ~ kommen. d. i. herunterkommen. Wenn de ~e dick sind, friert se! d. i. nach dem Essen ist man faul.

hurrah, 待ち憧れてゐたものが出て來た場合: ~ die Enten!

S

i, 驚愕、拒絶等を示す感嘆詞: ~ wat! ~ seh mal an! ~ wat Sie sagen! — ~ wo! d. i. keineswegs. ~ man nich! ~ wo

wer't denn! ~ bewahre! d. i. Gott bewahre!

id, ich. 獨立的に用ひし場合: ide.

Idee, Kleinigkeit. Keine ~! d. i. durchaus nicht.

immer, 肯定語として ja と殆んど同意に用ひらる: Na ~! ~ musste sagen.

immerzu, 1) fortwährend: ~! (否定的主張— Det kannst du doch nich heben! 等の如き—を拒絶する場合に用ふ). 2) ja.

inbrocken, 胸氣を催す。

infallen, einfallen: Det fällt mir janich in!

injenommen, eingenommen.

intriejen, einholen, erreichen, einnehmen.

inpacken, Packen Sie in! d. i. gehen Sie ab! Der kann ~. d. i. er ist abgetan.

insultieren, konsultieren.

is nich! 拒絶の形式 Kann man hier durch? Is nich, jehn Se hinten rum! Wenn't nich is, denn is 't nich. d. i. dann ist es auch nicht schlimm.

S

ja, Ja doch! 及び Me doch! は不機嫌に ja 及び nein と答へる場合に用ふ。Ja wol. od. ja woll och. d. i. das ist nicht der Fall. od. das fällt mir nicht ein.

Sacke, Det is 'ne alte ~. d. i. das weiß man längst. aus de ~ jehn. d. i. aus der Haut fahren. Det is ~ wie Hose. d. i. eins wie's andere. eenen de ~ auskloppen d. i. ihn durchprügeln.

jagen, Damit könn' Se mir ~! d. i. das mag ich nicht.

Jang, Gang. Et is nich in ~e. d. i. nicht im Betrieb. Dir wer id uf'n ~ bringen! d. i. zur Ordnung.

jarnich, janich! gar nicht.

janischt, gar nichts. **Ja** sage ~! d. i. ich übernehme keine Verantwortung. **Keen** ~ (物を算へる際、最後に附して、絶無を表はす)。

Jans, Gans. 伯林語の發音の特徴である i (g の代りの) を揶揄して用ひらる: Eine jut jebatene ~ is eine jute Jabe Gottes.

janz, ganz. ~e Stiebeln d. i. nicht zerriffene.

Jarten, Garten.

Jed, Spaß.

jefallen, gefallen. Det laß id mir ~! d. i. das ist schön (recht).

jeforben, gefärbt.

jehn, gehen. Dette jehst. d. i. mach, daß du wegkommst. **J** ~
Se! d. i. das glaube ich nicht. Se jehst mit ihn. d. i. sie hat ein Verhältnis mit ihm.

Jeist, Geist. Mensch. Wat is 'n det for'n ~? Die janzgen ~er.
d. i. alle Anwesenden.

Jejenstand, Gegenstand. Det is keen ~. d. i. nicht teuer.

jekrazt, geschmeichelt.

jeladen, betrunken, reizbar, voll von Einfällen.

Jeld, Geld.

Jeloofe, Laufen.

Jemiete, Gemüt. 1) trinken: sich eenen ~ führen. 2) verrückt werden.

jemischt, ordinär, anstößig.

Jemüse, 人を罵詈し又は揶揄するときに用ふ。Krummes ~!
Du armes ~!

jenau, genau. Dat ist nisch Genaes. d. i. nicht so, wie es sein soll. Is det 't Genaesste? d. i. Lassen Sie nichts ab?

jerne, nicht mehr wie ~! d. i. sehr gerne.

Jeschichte, Mach man keene ~en! d. i. werde nur nicht krank! Umstände の代りにも用ふ: Mach man keene ~en un komm mit! 遠慮なんかせずに一緒に來給へ。Faule ~n! d. i. Schwindel.

Jesichte, 未知な者が來たことを注意する場合: Sie da mit's ~! —Stech dir in't ~! 顔を撲つぞ。

Jestell, Mensch. Wat is 'n det for'n ~?

jesund, schlau, regsam, praktisch: 'n ~er Junge.

jewis, Na ~ doch! d. i. freilich.

jiefen, gießen. regnen, begießen.

jleich, gleich.

jlooben, glauben. **Ja** jloobe jar! d. i. ich will nicht hoffen!

Jott, Gott. Manu mach dir mit'n lieben ~ bekannt! d. i. dein Ende ist nah. Sie sind janz von ~ verlassen? d. i. Sie sind nicht bei Troste? Et is viel von ~es Wort zu reden. d. i. die Leute führen es im Munde, (halten aber nichts davon)

jraulich, furchtsam.

jrrien, 1) grün. 2) dumm, unerfahren.

Jroschen, Groschen 十片白銅. Bist wol nich bei ~? d. i. bei Sinnen. Er is sehr uf de ~s? d. i. knauserig. ~ は佛語 groß (dic) に由來す。

jroß, viel に代つて用ひらるることあり: Wat wird er denn ~ verdienen?

Jurke, Gurke. Nase.

jut, gut. Da bin id dir ~ davor. d. i. dafür stehe ich dir. Machen Se't ~! d. i. leben Sie wohl! Det is so ~ wie janischt. d. i. Unsinn, nichtig.

Raffe, Raffer.

raputt, 凡て壊れることを意味し、一般に廣く使用されてゐる國際語である。～は又 *bankrott* をも意味する。形容詞にも用ひらるることあり: 'n ~et Fenster. 此の語は佛語 *capot* より來る。

Rarpe, Rarpfen.

Ratoffel, Kartoffel.

Reber, Käfer. niedliches Mädchen. 大きい懐中時計を意味することあり。

Reile, Schläge.

Rerl, (spr. Kerrel) Det is überhaupt keen ~! d. i. kein Mann.

Rese, Käse.

res, fein. 轉じて schlagfertig. frech 等の意に用ひらる。

riebig, derb, tüchtig.

Riesel, Rüslein.

Riefen, gucken. Rief mal an!

Rirche, Gottesdienst. De ~ jehst an.

Riste, Sache, Angelegenheit. Fertig is de ~! d. i. die Sache ist gemacht.

Rlappe, Mund, Bett.

Rlasse, 'n ~ Sache. d. i. schön gewachsenes Weib. 'ne ~ Bijarette.

Rlavier, 出齒の口. Machen Se doch man Ihr ~ zu!

Rleene, klein. Det kann ick janich ~ kriegen. d. i. nicht begreifen.

Ich wer't noch ~ kriegen. d. i. hinter die Wahrheit kommen.

Rlinik, 修繕所. Femden-, Puppen-, Stiefelklinik.

Rlobig, grob. 副詞のときは sehr.

Ribbe, Ohne de ~. d. i. ohne de Nebenkosten.

Rnacke, dickes Butterbrot.

Rnicker, Schirm, Geizhals.

Rnippfen, photographieren, scharf abscheiden.

Rnopp, Mensch: 'n komischer ~.

Rnubbel, dicke Person.

Rnufft, 1) Stück Brot, Ranten. 2) 編まないで一束にした婦人の髪. 3) Obstgehäuse.

Robbern, 小物を洗ふ。

Rohl, 1) Det macht 'n ~ nich fett! d. i. zu wenig. 2) Geschwäg.

Rohlrübe, 1) Verstehn Se nich ~n! d. i. verstehen Sie doch recht!

Rolossal, Roloffis, sehr.

Romisch, sonderbar 或は auffallend の意味に往々用ひらる: 'n ~et Benehmen.— Er is mir sehr ~ jekommen. d. i. fast beleidigend. Sei nich ~! d. i. mach keine Umstände!

Rommen, 1) kosten: Wie hoch kommt 'n das? 2) Ich wer dir jleich ~, paß ma uf! (恐喝の場合). Kommste heite nich, kommste morjen! d. i. es geht ja sehr langsam. Na mir ~ Se nich! d. i. dafür danke ich.

Rönnen, Ich kann Ihnen sagen. d. i. Sie ~ mir glauben. Hastie wat kannst. d. i. schnell.

Roofen, laufen.

Ropp, Kopf. Det wees ick aus'n ~. d. i. auswendig. Den wer't uf'n ~ kommen! d. i. ihn schelten, strafen. Ich kann 'n doch nich vor'n ~ stoßen. d. i. ihn nicht kränken. Er is nich uf'n ~ jefallen. d. i. nicht dumm. Et stimmt uf'n ~. d. i. genau. Der hat seinen ~ for sich. d. i. er ist eigensinnig.

Rram, 行商人の品物. 無價値な, 役に立たぬ品物又は人: all der ~, so'n dummer ~.

Rrawall, 街の騒ぎ, 喧嘩。

Kriejen, 1) bekommen: Kriecht man hier Rum (ラム酒)? 2) einholen. 3) Det wer'n wir schon ~. d. i. zurechtbringen. 4) fassen: bei'n Kragen ~. 5) erwischen.

Krumm, Er licht ~. d. i. er hat kein Geld. Det licht an de ~e Hosen. d. i. D-Beine.

Kulör, 佛語 (couleur) Farbe.

Kurage, Mut よりむしろ Kraft の意味に用ひらる。

Q

laafen, lassen.

Laban, langer Mensch.

ladieren, betrügen. reinfallen lassen.

Laden, eenen ~ uffmachen. d. i. Bezugsquelle finden, Beziehungen herstellen.

Lampe, 電燈, 瓦斯燈等凡て Licht を意味す: Seh aus de ~!

Landpartie, Ausflug. ein weiter Weg.

Länge, Länge.

langen, reichen, ausreichen. Lang mir mal det her. Det langt nich.

Lappen, Ohr. — een blauer ~. d. i. ein Hundert-Markschein.

Larmstange, 身體の大きい喧嘩好きの女.

lassen, Laß mir! d. i. laß mich in Ruhe! Laß dir man nischt aus! d. i. sei verschwiegen oder auch bescheiden. Lassen Se man, ick weefß schon! d. i. erzählen Sie nicht weiter!

Laster, Mensch: 'n langet ~.

lauern, warten: Mutter lauert mit'n Kaffe.

Laus, Scene ~! d. i. durchaus nicht. Mich de Klasse ~. d. i. kein Gedanke!

Leiche, Begräbnis を代用することあり。

lejen, legen. Ma ~ Se't man da hin! d. i. lassen Sie's gut sein. (拒絶又は感謝の場合に)

lernen, lehren: Wer hat dir'n det jelernt?

lestens, neulich.

lieberst, lieber.

liejen, liegen. Det licht nich in ihn drin. d. i. er hat keine Anlage dazu. Det licht mal so drin. d. i. das ist nicht zu ändern.

lila, halbfleiden, ziemlich.

Löffel, Ohren.

loofen, laufen, 廣く gehen の代りに用ひられてゐるが, 特に fahren の對語としての意味が, その根底に横はつてゐる: Ich bin 'n jungen Weg jeloofen.

los, ~ davor! d. i. fange an! Der hat wat ~ d. i. er ist begabt. Mit den is nischt ~. d. i. er taugt nichts.

loosjen, 1) anfangen. 2) weggehen.

loosziehen, weggehen.

Luder, Was と略同意義.

Luft, an die frische ~ sejen. d. i. hinauswerfen. halt de ~ an! d. i. sei still, hör' auf!

luttschen, saugen.

M

machen, 1) 督促: Mach, gib ma wat ab! Mach doch! (早く)! 2) kosten: Wat macht'n? det 3) spielen: Er macht 'n Lohenjrin. 4) reisen: Er hat nach 'n Spreewald jemacht.

- 5) meiern: Ich biste gemacht. 6) handeln: Er macht in Ansichtskarten. 7) Det macht sich. d. i. es läßt sich gut an. 8) de Haare ~, Betten ~, Feier ~.

mächtig, sehr.

Matrase, Matraße.

man, nur (伯林人は nur を殆んど使用せず): Na ich sage ~! Laß ~ jut sind! ~ bloß = nur bloß.

mang, unter.

Männken, 老人に對する呼稱, Doleken ともいふ.

manschen, mischen.

Markt, Markt.

Masse, Menge.

mau, 1) unwohl. 2) dürftig. 3) kreditunwürdig.

Maul, Er war wie uf't ~ jeschlagen. d. i. er war zum Schweigen gebracht. Er hat's ~ vorne weg. d. i. er ist vorlaut.

machten, mögen: Det hätt ich ~ j. hu!

Meechen, Mädchen.

meenen, sagen — meent er. d. i. sagt er. Meenste nee? d. i. bist du anderer Ansicht?

Mensch, 驚嘆の場合に用ふ: Wet sagt der ~?

Menschheit, Menschenmenge.

mies, häßlich, unangenehm.

Müll, Müll, Schericht.

Mulle, Mühle.

Mittag, Mittagessen: Geite krieg ich keen ~.

Möbel, 愛好する物を云ふ: —So'n ~ (ステツキでも, 夜具でも何でも差支へなし). So'n ollet Stick ~ (こんな老人):

Mojabit, Moabit 刑務所: Du kommst nach ~.

Monschein, Mondschein.

munkeln, 1) Et munkelt. d. i. es sieht drohend aus (天候).

1) Mann munkelt. d. i. man spricht unbestimmt:n Gerüchter.

Mutter, Bei ~ n jehn. d. i. nach Hause gehen.

㊦

'n, ein, einen, denn, ihn, den 等の略語.

na, 1) 肯定: Na ob! 勿論さ. 2) 否定: Na ooch noch! 3)

驚愕: Na sowat! 4) 憤激: Na wat 'n noch! 5) 慰安: Na denn man zu! d. i. meinethwegen. 6) Na jrade. d. i. eben darum!

nanu, 人間の感情例へば驚嘆, 同情, 激怒等を示す感嘆詞として, 最も多く用ひらる言葉である. 多くの場合, 他の語と連結して用ひらる: Nanu man zu! Nanu nee! Nanu jelt los! Wat sagste ~?

Nase, alle ~ lang. d. i. jeden Augenblick. Immer de ~ lang! d. i. geradeaus. Da bin ich widder mal ~! d. i. angeführt. Biere pro ~. d. i. pro Person.

nee, nein. 併し乍ら nee は nein の如く決定的に否定を示さぬこともある. 又 nee は疑惑的な驚きを現はす場合もある~? (此の場合は Nanu? と同意)

needig, nötig.

neine, neun.

Nese, Nase. Ich hab de ~ voll. d. i. ich habe genug davon. Jetzt bin ich ~. d. i. reingefallen.

nich, nicht. ~ doch! (柔い拒絶). ~ jehn! d. i. geh mir damit. ~ zu machen. d. i. nein, durchaus nicht. ~ は又 nicht wahr の略語としても用ひらる.

nischt, nichts. For ~ un wieder ~. d. i. ohne jeden Grund. ~ zu wollen. d. i. es ist nichts zu machen.

nu, nun. ~ nee! ironisch = recht gehörig.

O

ob, wie kannst du zweifeln 等を略せる場合, 副文章の初めに ob を用ふることあり: Ob se dumm is!

ochsen, 熱心に勉強すること (學生用語)。

öde, langweilig.

Ohr, Schreib dir det hinter de ~en. d. i. merk' dir das! Du siht wol uf de ~en b d. i. du kannst wohl nicht hören?

Olle, Alte. Meine ~ d. i. meine Frau. 形容詞として用ふる場合は名詞を伴ひ客語的に使用されない; er is 'n offer Mann は正しいが, er is oll は誤である。

Onkel, 他人に対しても用ひられ, 親しみを含む: Fragen Se doch mal, wat der ~ will.

ooch, auch. In'n Dag ~. d. i. guten Tag.

Ooge, Auge. Hinter mir hab ick keene ~n. (他人の足を踏み又は突いたときの辯解の言葉). Bei dir sind ooch de ~n jrößer wie der Magen. (食へる以上に, 食物を皿へ盛りたるときに用ふ). Det konnte noch in 't verkehrte ~ jehn. d. i. mißglücken. Lange ~n machen. d. i. etwas verlangend ansehen.

orntlich, ordentlich. 1) wirklich: Det hat ~ jebliht! 2) gehörig: Den ha'm se ~ zujedeckt.

ordinär, gemein.

P

Paddeln, バタバタ泳ぐこと。

paffen, 煙草をスパスパ吹かすこと。

Paket, 1) Ausbund. 2) begleitendes Mädchen.

Pantinen, Holzschuhe.

Parpe, 1) Nase. 2) Pfeife.

Part, Parte, Partei.

passen, Paß mal Acht! d. i. gib acht. Det paßt mir nich. d. i. das mißfällt mir. Det kennte dir so ~, wat? d. i. das könnte dir wohl gefallen!

Petroljum, Petroleum.

Piccolo, Kellnerlehrling.

Pickel, kleines Geschwür.

Piefe, Groll: Er hat 'ne ~ uf mir.

Piepe, Pfeife. 形容詞の場合は gleichgültig: Mir is allens piepe.

politisch, schlau.

Portmannee, Portemonnaie 財布は一般に斯く云はれてゐる。

Posten, 1) Menge. 2) beliebte Frau.

Priem, Raufabak.

Probe, Nix de ~. d. i. nicht das geringste.

Droppen, Pfropfen. ~ は又 Froppen, Tropfen, Propfen 等とも云はる. Er is uf'n ~. d. i. in Verlegenheit.

Publikus, Publikum.

Buckel, Puckel, Buckel, Rücken.

pumpen, borgen, leihen: Könn' Se ma wat ~?

Puppe, 1) ~! d. i. sehr fein. 2) Er läßt alle ~ dancen. d. i. alles draufgehen. 3) Geld (複數形). 4) Bildsäule. 5) ungewöhnlich, stark: Es regnet bis in die ~.

pusten, 1) blasen. 2) husten. 3) (壓搾) 氣送郵便で通知する.

Q

quackeln, unnütze Redensarten machen (小兒の如く).

Quatsch, 1) sinnloses Gerede: Machen Se keen' ~! 2) albern

kindisch, finnlos. (動詞, 形容詞として)
quatschen, Unsinn reden: quatsch nich!
quazeln, viel und töricht sprechen.
Quecksilber, Der hat ~ in' Leibe. d. i. er hat keine Ruhe.
Quetsche, kleiner unbedeutender Laden.
quosen, viel und langweilig reden.

R

Rab, Komm nich unter de Reder! d. i. verunglücke nicht! **Rat**
 は Taler を意味す。
Rabán, Lärm, Unfug.
Raffe, 戦争成金, 革命成金, インフレーション成金.
ran, heran.
ranjehn, Da jehn wa ran. d. i. das machen wir mit. Da
 j'h id nich ran. d. i. das wage ich nicht.
Raße, Ratte.
räubern, stehlen.
raus, heraus, hinaus: Det hat er ~. d. i. das versteht er. Et
 jibt wat ~. d. i. Schläge. Raus davor! d. i. heraus mit
 der Sprache!
rauskommen, 1) offenbar werden. 2) Dabei kommt nicht
 raus. d. i. das nutzt nichts.
rauskriegen, 1) Ich kann't nich ~. d. i. ich kann es nicht
 erraten. 2) Ich kriege noch wat raus. d. i. ich bekomme noch
 Geld zurück. 3) gewinnen, retten.
recht, Da haben Sie wieder ~. (意見を交換するとき和解的
 に譲歩して云ふ). Is ihn ganz ~! d. i. es geschieht ihm recht.
Ribbe, Rippe. Ich kann't mir doch nich aus de ~n schneiden!
 d. i. woher soll ich es denn nehmen? Det hat er durch de

~n jeschwißt. d. i. vergessen. Sich etwas durch die ~n schwigen.
 d. i. Unmöglich's tun. Er hat wat uf de ~n. d. i. er hat Ver-
 mögen.
richtig, 1) 同意の場合: Aber ~! 2) 喜んで同意する場合:
 So wa't ~! 3) wirklich: Er hat 't ~ falsch jemacht.
riechen, Ich rieche den Braten! d. i. ich merke etwas. Den
 kann ich nich ~. d. i. nicht leiden.
rin, herein, hinein.
rinfallen, 1) hineingeraten. 2) sich verloben. 3) 自己瞞着,
 又は詐欺, 損害によつて苦しむこと.
riskieren, Ich riskier de ganze Miete. d. i. ich setze alles aufs
 Spiel. eenen ~. d. i. trinken.
Rooch, Rauch.
Rosß, Dummkopf.
Rot, Blut (恐喝の場合): Hast wol lange keen Berliner ~
 jesehn?—Das rote Haus=Rathaus.
Rosß, Nasenschleim.
Rummel, 1) Festlichkeit. 2) Geschäft. 3) der ganze ~. d. i.
 der ganze Rest, Fram.
rund, 別れの挨拶: Schlaf ~!

S

Sache, (Na) ~! d. i. gewiß, natürlich. ~ Mag! d. i. ganz
 sicher. Det is sonne ~. d. i. das ist schwer zu entscheiden.
 Det is 'ne ~. d. i. etwas Gutes. Man soll nich sagen, wat
 'ne ~ is. d. i. man kann ja nicht wissen, was daraus werden
 kann. (上例の中 Mag は男に對する總稱)
sachte, 雨の熄んだ場合: Immer ~ weg. 安否を尋ねられた
 場合: Na man immer ~! 注意を與へる場合: Immer ~

- mit de jungen Ferde. 苦痛を訴へる場合: Det dut nich ~.
- sacken**, 1) Et sackt sich. d. i. es sinkt. 2) gewinnen.
- sagen**, Na wenn id 't Ihnen sage! d. i. Sie müssen es glauben. Det is nich jesagt. d. i. es steht nicht fest. Jā habe mir sagen lassen. d. i. ich habe gehört. Hat nisch zu sagen! d. i. bitte sehr. (danke schön 又は bitte um Entschuldigung と云はれた場合の答).
- samft**, sanft.
- sauber**, schön, famos: Die neie Lampensocke schmeißt 't Licht ~.
- sauer**, Det kannst dir ~ kochen. d. i. für dich behalten. Det wird dir ~ uffstoßen. d. i. schlecht bekommen.
- schampeln**, 1) 許可なくして學校を怠ること. 2) schlendern.
- Schaffee**, Schaussee. 又 **Schoffee** とも云ふ。
- schau**, sehen.
- scheen**, schön. gut の意に用ゐらるゝこと多し: Det schmedt ~. Det jefällt mir ~.
- schemen**, schämen.
- scheußlich**, sehr. 特に schön と共に用ひらる: ~ schön.
- schieben**, 1) gehen: Könn' wa los~? 2) zum Ziele führen! Der wird det schon ~.
- Schieber**, 策略, 駈引等によりて利得せる人.
- Schiebung**, Mache, Intrige.
- schiefen**, 1) leihen. 2) hingehen.
- schimpfen**, schelten に代つて用ひらる.
- schinden**, 1) quälen. 2) genießen.
- Schlandal**, Skandal. 1) Lärm. 2) Argernis.
- schlau**, schlecht (但し皮肉的に云ふ場合).
- schlimm**, wund: 'n ~er Finger. Da is er ~ drauf. d. i.

- danach ist er begierig.
- schmaddern**, schmieren.
- Schmach**, Ruß.
- schmeißen**, 1) werfen: Schmeiß mir mal de Butter rüber!
2) zum besten geben: Schmeiß mal 'n Lage!
- Schmiere**, 1) Reile. 2) Masse: De ganze ~.
- Schmu**, Betrug.
- Schnauze!** weiterreden することを禁じさす場合の典型的命令用語. Halt de Schnauze! より意味強し.
- schneen**, schneien.
- schneiden**, 1) ビールを一杯以上注ぐ時: Det 's aber jeschnitten. 2) die Kur (Cure) ~. d. i. den Hof machen. 3) sich in einer Erwartung täuschen. 4) absichtlich nicht sehen.
- schnoddrig**, unehrlich, frech im Reden.
- Schnute**, Mund.
- schon**, 1) 強い否定: Jā nu ~ mal janich! (君は勿論演説せねばならないと云はれたとき, 僕なんか出来つこないと答へるが如きである). 2) doch, endlich の代りに用ふ: Komm ~!
- Scho-schteen**, Schornstein.
- Schose**, 1) Angelegenheit. 2) Dummheit.
- schrecklich**, sehr: Wir ha'm uns ~ ammiffert.
- Schrippe**, フランスパンの一種.
- Schwamm**, 1) ~ drüber! d. i. reden wir nicht weiter davon.
2) Masse.
- Schwein**, 1) gemeiner Mensch. 2) Glück.
- schwer**, groß, sehr, stark.
- schwul**, schwül.
- Seefe**, Seife.
- sehen**, geben: Er setzt Reile!

siehste, siehst du. 懇願の形式. 特に小供に愛用さる: ~ Mutti, gib mir doch 'ne Stulle! Ach ~!

sind, Wat kann da sind? d. i. was kann es schaden? Wie kann man bloß so sind! d. i. so schlecht. Ich kann nich so sind! d. i. ich bin zu gutherzig, um das zu verweigern. (上例の如く sind は sein を代用す);

so, Ach forum? d. i. so meinen Sie? Mir jeh't's so weit janz jut. d. i. im allgemeinen gut. Kommen Se doch mal ~. d. i. ohne besondere Einladung.

so'n, so ein, solch.

Soffa, Sofa.

Sohnemann, 小供を一般に親んで呼ぶ言葉. Hans は Hansemann と云ひ, August は Autemann と呼ぶ.

Spaß, ~! d. i. das versteht sich. ~ ohne! d. i. ernsthaft! Da muß aber eener ~ verstehn! d. i. das ist doch zu toll. Viel ~! d. i. viel Vergnügen! (別編).

spucken, 1) Er spuckt de Schwäne uf de Köppe! d. i. er hat nichts zu tun. Spuck'n doch uf de Stiefeln! d. i. laß dir nichts von ihm gefallen! 2) wild: Aber der hat jespuckt! 3) auf Andrängen Geld herausrüden.

Spur, keene ~! d. i. durchaus nicht.

Staat, Buß.

stechen, stechen und stecken: eene eenen ~. d. i. eine Ohrfeige.

Steen, Stein.

Stengel, Er fiel von' ~! d. i. er war sehr erstaunt.

sterzen, stürzen.

Stück, Stück 人又は物の單位: 'n ~ Malerjehilfe (=Maler), 'n ~ Feld.

Stiebel, Stiefel. 1) Dein ~ hat Hunger. d. i. er ist vorn an

den Behen entzwei. 2) Stil: Der schreibt 'n juten ~ zusamm (=zusammen). 3) In een' ~. d. i. auf einmal.

stimmen, Stimmt! お釣は要らない(給仕などに釣銭を酒代として與へる場合). Det stimmt! (同意の場合).

stoßen, Stoß dir man nich! d. i. verrechne dich nicht!

strampeln, 脚を激しく動かすこと。

strebern, fleißig sein (學生用語)。

Streichholz, dünner Mensch にも用ふ。 **Streichhölzer**, dünne Beine.

Strippe, 1) Bindfaden. 2) Schnaps zum Weißbier. 3) Et rejent ~n. d. i. so, daß man Strich sieht, die einzelnen Tropfen bilden.

Strump, Strumpf. Ich wer mir sachte uf de Strümpe machen. d. i. ich werde gehen. Er hat heite de Strümpe verkehrt anjezogen. d. i. er ist übel gelaunt.

studern, 車に突かれること。

Studiker, Studierender.

stufen, 1) hart aufstoßen. 2) untertauchen (水泳の際)。

Stulle, Brot: ~ mit Schleppe. d. i. reich belegtes Butterbrot.

Stummel, Ende einer Zigarre, eines Lichts, Stumpf eines Zahns.

Suppe, Unter aller ~. d. i. unter aller Kritik. Die Uhr jeh't nach de ~. d. i. schlecht.

§

Tatterich, Bittern der Hände: Er hat'n ~. 轉じて何事も過度に行ふことを意味す: Rede~, Musik~.

See, in ~ sein. d. i. 1) angetrunken sein. 2) beim Lehrer beliebt sein. —Laß dir ~ kochen. d. i. du sprichst im Fieber.

- Zepper, Töpfer:** ~! d.i. ungeschickter Mensch.
- Ziete, Tüte.**
- Zinte,** 1) in de ~ sitzen. d.i. Verlegenheit. 2) Du hast wol ~ jesoffen? d.i. bist du verrückt?
- tippen,** 指で軽く觸れること。
- Zon, Wort:** Er red keen' ~.
- Zörkel, Glück:** Er hat 'n furchbarn ~.
- Zran, in ~ sein.** d.i. betrunken sein.
- Zräne, 'ne ~.** d.i. ein Schluck Schnaps.
- Zraute, Mut:** Er hat keene ~. d.i. er wagt es nicht.
- Zreppe,** 1) Stufe: Wieviel ~n kannst du'n springen? 2) Stockwerk: Er wohnt drei ~n. 3) Du bist ja de ~ runterjesfallen. d.i. du hast dir die Haare schneiden lassen.
- treten,** 1) Tritt dir man nich uf'n Rock! (成長して着物が合はなくなつた者に向つて). Rich zum Treten. d.i. gedrängt voll. 2) 金など出さすように強ゆること。
- triezen,** drängen, peinigén.
- Zrockentwohner,** 新築の家を最初に借りた人。
- Zrost,** Du bist nich bei ~e. d.i. nicht bei Verstande.
- Zrubel,** Aufregung, Auflauf.
- trudeln,** rollen.
- ti 7, 8,** 1) trotzig. 2) ärgerlich.
- Zulpe,** 1) Nase. 2) 風に吹き捲くられた雨傘。

U

- über,** 1) Darin bin ich dir ~ (=überlegen). 2) Det ist mir ~. d.i. ich bin dessen überdrüssig. 3) ~ sich haben. d.i. darüber disponieren können.
- überhaupt,** 1) 同意を示す: Na ~! 2) ~ un so. d.i. und

- so weiter.
- übrig,** Det is ~. d.i. nichts wert. Det wa ~. d.i. es hätte unterbleiben sollen.
- uff, uf,** auf. 前綴の場合は常に uf.
- ufhängen,** Er hängt sich nach uf. d.i. er begehrt es heftig. Hängen Se sich uf! d.i. legen Sie Ihre Sachen ab!
- ufziehen,** 1) Die Wache wird ufgezogen (上番する). 2) necken 3) Er is ufgezogen. d.i. er ist ins Erzählen hineingelommen.
- um, Umweg:** Det is sehr ~.
- und?,** 呼ばれし場合の答: (Müller!) ~ d.i. was soll ich?
- Uujlück, Unglück.**
- Unkosten,** Geschäftskosten.
- unten durch,** Er is unten durch. d.i. in Verachtung gefallen. od. drunter durch.
- unverschemt,** sehr.
- unwohl,** Se sind wol nich ganz ~? d.i. bei Verstande?
- üppig,** übermütig.

B

- va—, 前綴 ver—.**
- verbriehen, verbrühen.**
- verbummeln,** 1) Die Zeit müzig hinbringen. Er is verbummelt (彼は國家試験を受けなかつた). 2) vergessen: Det hab ich veene verbummelt.
- verdrücken,** 1) durchbringen. Die ha'n da 'ne Menge Feld verdrückt. 2) 満腹に拘らず, 尚食事を欲すること. 3) sich ~. d.i. sich aus dem Staube machen.
- verflucht,** sehr.
- Verhältnis,** Liebster 又は Liebste.

verheiraten, Da bin id schlecht verheirat. d.i. schlimm angekommen. Wir sind ja nich verheirat. d.i. nicht aneinander gebunden. Er ist jut verheirat. は大抵 er hat ein böses Weib の意に用ひらる。

Verjuijen, Vergnügen.

verknaden, 1) verbrauchen. 2) verurteilen.

Verlaf, Uf den is keen ~. d.i. man kann sich nicht auf ihn verlassen.

verquast, verwirrt, verwickelt.

verrückt, Jawol, da bin id ganz ~ nach! d.i. begierig (但し皮肉的).

verstehn, ~ Se. は話の拙い人々によつて, 會話の中へ時々挿入さる。Verstehste wol? は話の句切毎に強意的に用ひらる。

vill, viel: Mutter, gib mir wat (zu essen), aber ~!

vollmachen, verunreinigen: Sie ha'm sich volljemacht.

W

Wa ?, 1) Was? (了解出来ない場合, 聞直す言葉, 特に小供に愛用さる。2) Wa? は nicht wahr? を代用す。

wahastig, wahrhaft.

wat, was. Ach ~! d.i. laß mich in Ruhe! Wat haste ~. kannste. d.i. in aller Eile.

weenen, weinen.

weg, (spr. wech) Det hab id ~. d.i. Iegriffen. Er is ganz ~. d.i. hingeriffen.

Weg, (spr. Weech) Det hat noch jute ~. d.i. es ist noch viel Zeit bis dahin. —Bei Weje sein: 1) schon zu sprechen sein. 2) Er is jut bei Weje. d.i. er befindet sich gut.

Weijse, 飲む酒の壺又はコップ。

wett, Det jekt entschieden wieder nich ~ genug. d.i. es geht zu weit. Wenn't ~er nischt is! d.i. wenn nicht mehr verlangt wird.

weijen, wegen. Von ~! d.i. davon kann keine Rede sein.

wenn, Wenn schon, denn schon. d.i. wenn es sein muß, soll es auch gut sein. Wenn ehr? d.i. wann.

wern, werden.

wetten, So ha'm wir nich jewett. d.i. das ist gegen die Abrede. Wetten daß? d.i. wollen wir wetten?

widder, wieder.

Wippe, Schaukel.

wissen, Na weefste! (口答への冒頭に用ふ)。Der weef, wo 't lang jekt. d.i. er ist gewigt.

Wort, Haste ~e? d.i. was soll man dazu sagen!

Wunder, Er hat seinen ~. d.i. seinen Kummer. Det jibt vill ~. d.i. viele Umstände.

Wurfcht, ~ wider ~. d.i. wie du mir, so ich dir.

3

Zauber, Festlichkeit, Aufführung, Schwindel: Den ~ kenn' wa, 又は單に ~! と云ふ。

Zehne, Zehen.

Zeich, Zeug: Dummet ~!

Zide, 1) Ziege, Zidenbock, Zidenbart. 2) dürres Weib. 3) ~n は Dummheit: Mach doch keene ~.

Zo, Der zoologische Garten.

zu, Na denn man ~! d.i. jekt kann es losgehen! 'ne ~e (zuige) Droschke. d.i. eine geschlossene.

Zug, eenen uf'n ~ haben, d.i. ihm zürnen. Manu ~ im los!

d.i. fang' an!
zwei, zwei.
Zweunddreißigte, Nummermehrestag: uf'n ~n hab id Hochzeit.

昭和十年一月十五日 第一版印刷
昭和十年一月二十日 第一版發行
昭和十年一月廿五日 第二版發行

版權所有

不許複製

「伯林語」

—定價壹圓—

著者 小村實
發行者 佐藤義人
東京市牛込區西五軒町三十二
印刷者 岩本米次郎
東京市赤坂區青山南町二ノ十六

發行所

大學書林

東京市牛込區西五軒町卅二番地

振替東京四三七四〇番

電話牛込(34)三三四四番

(青山 雙光堂印刷)

(共文堂製本)

獨逸語參考書

大學書林編	獨逸語習字帖上・下	四六倍オフセット刷 24頁	各冊 .30 .04
藤原 肇 著	獨逸語發音五時間	四六判紙裝 總頁 50 頁	.30 .02
大學書林編	獨逸語基礎千五百語	三五判紙裝 總頁 80 頁	.50 .02
大學書林編	獨逸語常用單語六千	三五判布裝 總頁 350 頁	1.50 .06
森 偽 郎 著	獨 逸 語 四 週 間	四六判布裝 總頁 400 頁	1.50 .10
岡田俊一著	暗記用獨逸文法	四六判紙裝 總頁 100 頁	.70 .04
岩本經丸著	初步獨逸文法要訣	四六判布裝 總頁 360 頁	2.00 .08
鼓 常 良 著	活用獨逸文法	四六判布裝 總頁 170 頁	1.30 .06
山岸光宣監修	獨逸語短期大學(全三卷)	四六判布裝 總頁各 370 頁	各 1.50 .10
小原靜人著	中 級 獨 逸 語	四六判布裝 總頁 350 頁	1.50 .10
内田 貢 編	獨逸語名詞の性	四六判紙裝 總頁 52 頁	.30 .02
渡邊格司著	獨逸語造語法	四六判紙裝 總頁 106 頁	.60 .04
櫻井和市著	獨逸語話法の研究	四六判紙裝 總頁 60 頁	.30 .02
内田 貢 編	獨逸語常用熟語一千句	四六判布裝 總頁 180 頁	1.00 .06
江上 敏 著	獨 逸 文 の 構 造	四六判紙裝 總頁 160 頁	1.00 .06
高坂義之 共著 W.ロート	高 等 獨 作 文	四六判布裝 總頁 250 頁	1.20 .08
磯部幸一著	獨逸醫文の書き方	四六判布裝 總頁 170 頁	1.50 .06
三浦吉兵衛編	高等獨逸語講座(全三卷)	四六判布裝 總頁各 250 頁	各 1.50 .08

語學四週間叢書

本叢書は凡て一日一課、文法譯讀兼習で四週間で語學が一通り會得される組織になつており、發音は音標文字と口形圖にて指導され、特に質問券によつて責任應答の特典があります。即ち世上幾多の參考書中最も低廉且つ最も責任ある叢書であります。

森 偽 郎 著	獨 逸 語 四 週 間	四六判布裝 總頁 400 頁	1.50 .10
德尾俊彦著	佛 蘭 西 語 四 週 間	四六判布裝 總頁 360 頁	1.50 .08
松 本 環 著	英 語 四 週 間	四六判布裝 總頁 450 頁	1.50 .10
德尾俊彦著	伊 太 利 語 四 週 間	四六判布裝 總頁 350 頁	2.00 .08
岡澤秀虎著	露 西 亞 語 四 週 間	四六判布裝 總頁 320 頁	1.50 .08
宮島吉敏著	支 那 語 四 週 間	四六判布裝 總頁 270 頁	1.50 .08
小野田幸雄著	エスペラント四週間	四六判布裝 總頁 300 頁	1.50 .08
松 本 環 著	英文解釋四週間	三五判布裝 總頁 450 頁	1.50 .08
笠井鎮夫著	西 班 牙 語 四 週 間	四六判布裝 總頁 360 頁	2.00 .08
星 誠 著	葡 萄 牙 語 四 週 間	四六判布裝 總頁 460 頁	2.50 .10
白根孝之著	希 臘 語 四 週 間	未 定	未定
村松正俊著	羅 典 語 四 週 間	未 定	未定
出村良一 著 竹内幾之助	蒙 古 語 四 週 間	未 定	未定

獨逸語短期大學高等篇別名

高等獨逸語講座

全三卷 各册 定價壹圓五拾錢 送料八錢
四六判布裝 二百五十頁

講 師	東北帝大 助手 石田芳穗	九州帝大 大元教授 石濱知行	浦和高校 教授 上村清延	文二高 校教授 小池堅治	文二高 校教授 佐久間政一	東京商大 教授 吹田順助	醫學 士 水上隆吉	文一高 校教授 三浦吉兵衛
--------	--------------------	----------------------	--------------------	--------------------	---------------------	--------------------	-----------------	---------------------

本講座の概観

高等獨逸語の最高峰——從來獨逸語講座の現はれるもの十を以て數ふるに至つたが凡て初等獨逸語の範圍を出でず、進んで専門學術の研究に志す獨逸語學習者は全くその去就に迷ふ有様であつた。こゝに大學書林は、我人共に許す最高權威者を一堂に會して、語學界多年の欲求を充たすことゝした。蓋し高等獨逸語學習の最高指針であらう。

廣汎なる講義範圍——輯録された各講義は、哲學論說、文學理論、自然科學、法律、經濟、社會學等あらゆる分野に亘り、各種各態の文章の萬化鏡をなしてゐる。これが統一ある講述方針のもとに配列され、文法的解剖と専門的考證の繁簡よろしきを得て、忽ち高等獨逸語の水準を會得するやうに組織されてゐる。

高等和文獨譯——每卷分つて五講座、その第四に和文獨譯講座を設けたのは、蓋し從來の參考書が譯讀と作文とを別々に講述するに對して、譯讀に連絡を取りつゝ作文を習得させようとする新組織を採つたので、本講座の特色たるを失はない。

好適の受験參考書——近年益々激甚を加へつゝある帝大受験に對して各高校の教授諸先生も獨逸語參考書の推舉すべきものがないのを慨かれてゐたといふが、本書の出現と共にその概きも一掃されるであらう。先づ本講座を手にして難關突破の戦闘に備へられよ。

311
697

終